

石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

吉岡玉吉

はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで栄えた街」として知られていた。
 しかし時代の推移によって街の中心は花畔、樽川(花川)地区に移り、今日では弁天歴史通りや石狩浜海水浴場あそび場、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。
 今日、鮭漁は海水面に於ける定置網漁の一漁法のみによって採獲されているが、昭和三十年までは、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取り上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五場所の地曳網が認められ、昭和四十年まで継続した漁法である。その後、平成十四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として観光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

- 一、漁業の名称
石狩川鮭地曳網漁
- 二、漁獲物の種類
鮭
- 三、漁業免許
鮭特別定第〇〇号 北海道庁

四、操業期間

走り漁 自九月一日 至十月三十一日
 後取り漁 自十一月十五日 至十二月末日

五、操業場所

石狩川 大正後期から昭和三十年まで

- 1、ヤウスバ場所 廃止 昭和初期
- 2、上真室 廃止 昭和六年頃
- 3、下真室 (渡船場上) 廃止 昭和十三年
- 注 昭和十五年同十八年まで地曳網名儀で日中、二隻の磯舟で流網漁を行う。昭和三十年前半、漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四、五年で中止。
- 4、若生場所(渡船場下) 廃止 昭和十五年
- 5、堀神威場所(呼称ホリカモイ) 昭和三十年
- 6、来礼場所(中洲) 大正末期
- 注 左岸昭和七年頃再開したこともある。
- 7、燈台下場所 廃止 昭和四年頃
- 8、志美 場所 明治後期

六、漁具の状況

これについては、漁場(川幅・水深・流れの強弱)によって、網丈・長さに相違あり。本項では堀神威場所を基準とする。
 昭和十年代
 地曳網漁は出網、袋網(スド)、入網(他出網・入網)からなる全長一五二尋(二二八メートル)によって構成されている。一脇即ち袋網に接続するところの網丈は、七尋(一〇、五メートル)、袋網(スド)は太三本子、二寸八分(八、四センチ)長さ八尋三尺(一一、九メートル)袋底に魚を追いつめて開放するため先端を網(ロープ)で結び、その網を一〇尋(二五メートル)

程度とし、その最先端浮子に付ける。袋網の位置に鳥籠子型の浮子(神威浮子)を付け目印とする。(曳網の中心を一目で判別出来るため)

1、出網

- 長さ五六尋(八四メートル)、網丈七尋(一〇、五メートル) 河水の増水によって二脇部をはずす。
- (一) 一脇太三本子、三寸目(九センチ)長さ二四尋(三六メートル)
- (二) 二脇、太三本子、四寸目(一二センチ)長さ三三尋(四八メートル)
- ① あば浮子たな手網 径五分(一、五センチ)のロープ。
- ② メクグリ 径一分五厘(〇、四五センチ) 麻糸。一割の寄せを入れ上下共同し長さとする。
- ③ 沈子手網 径五分五厘(一、六五センチ)のロープ。
- ④ 浮子 (昭和十年頃、横町加藤稀屋で作成)

木製(撥松)長さ一尺四寸(四二センチ)幅四寸(二センチ)厚さ、中其一寸四分(四、二センチ)両端五分(一、五センチ)その両端に穴を開け「アバ」をこれに通して浮子手網に結びつける。

一脇は八寸(二四センチ)間に隔て、一枚付け、二脇は九寸(二七センチ)一尺二寸(三六センチ)一枚付ける。

(三) 沈子手網の沈子

網足は鉛製で一個、量目二五匁(〇、九キロ)之を一脇八寸(二、四センチ)間隔に一個二脇は一尺(三〇センチ)間隔に一個を付ける。
 筋縄 径三分(〇、九センチ)の麻縄。長さ四尋(六メートル)を用いる。

(四) 立網

上網は径六分(一、八センチ)のロープ。長さ三尋(四、五メートル)で浮子手網に連なり、下網は径六分のロープで長さ五尋(七、五メートル)沈子手網に連なる。この量網を「ツボ」に合す。

2、入網

- 長さ九六尋(一四四メートル)網丈七尋(一〇、五メートル) 一脇から四脇まであり、長さ夫々二四尋(三六メートル) 網目、一脇太三本子 三寸目(九センチ) 二脇太三本子 四寸目(一二センチ) 三脇、四脇共三本子 五寸目(一二五センチ)とする。
- ① 浮子手網 径五分(一、五センチ)のロープ。
- ② 沈子手網 径四分(一、二センチ)のロープ。
- ③ メクグリ 径一分五厘(〇、四五センチ)の麻糸。一割の寄せを入れて上下共同し長さとする。
- ④ 浮子 注 河水の増水で三、四脇をはずす。

(二) 網足

鉛製、量目 一個 二五匁(九四グラム) 一脇は八寸(二四センチ)間隔に一個、二脇は一尺(三〇センチ)、三、四脇は一尺二寸(三六センチ)間隔に一個を付ける。

(三) 出網・入網の附属用具

- ① キンタマ石 量目 一貫目(三、七五キロ)位の自然石を荒縄またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手網に付け網の流れを調節する。
- ② チン(チエーン)の鎖 錨用の鎖。各脇に三十五個。増水時沈子手網につけ手網の振れを防ぐ。

おやち米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

おやち米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

おやち米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

おやち米造り米造り... 米造り米造り... 米造り米造り...

(三)

盛漁期に入り、一河に何十束も秋味が入ると曳網が半分位まで締められるころには、元気のよい秋味はボラ(鰯)のように浮子手網を飛び越えて出て行くもの、また網におつかって驚き、逃げ回り勢い余って陸に跳上ってくるもの様々で見ても飽きない程であった。

このようなころには漁夫が「ペンロ」(三年魚以下。一尺五寸「四十五センチ」以下の小型のもの)などを、観光に来た人や遊んでいる子供らに「ボラ、ケルから持っていけ」と投げてよこす程の豊漁で、見ている親方や船頭も黙然としていたものであった。

注)さけの一本(漁師は一尾とは数えず大方は一本または一匹と数えていた。豊漁の明治・大正の初期では本数で言わず「何束入った」と束数で数えていた。

明治・大正はもとより昭和六・七年頃までの五十集屋、渡しの一本は、目からはかつて尻尾の上、ウロコ三枚のこした一尺六寸(四八センチ)以上のもの。従って、二尺・二尺三寸(六六・六九センチ)以上で、巨万二貫六百匁(九・四九・八キロ)以上のものでなければ一本と云わず、それ以上では半本の値段であった。

(二)河にどの位獲れたか。大漁の年
明治時代海浜地曳網(大網)沖合二〇〇〇間三、六〇〇メートル一日一回 一河、二〇〇束(二万本)
大正時代、河川地曳網 一河、二〇〇束(二万束) 二河、二〇〇束(四〇〇〇束) 三河、二〇〇束(四〇〇〇束)

昭和二年頃、一河、二〇〇束(二万束) 二河、二〇〇束(四〇〇〇束) 三河、二〇〇束(四〇〇〇束) 四河、二〇〇束(四〇〇〇束) 五河、二〇〇束(四〇〇〇束)

(四)

漁夫の帆待(外持とも書く)内密の収入のこと。
雇主は漁夫により帆待や余禄(余分な所得)が頻繁に持て

(四)

られていたところから思案して豊漁時の最後の一河漁を漁夫の賞与(余禄)として提供したものであるが、当初は守られた。しかし時がたつにつれて網掛船の船底板子の下に船頭や役人の目を盗んで五・六本の鮭を掠めておき、夜陰に持ち出し、五十集屋に売ったり直接飲食店に持って行ったりして遊興費の一部としていた。本町地区在住の漁夫はせいぜいボラやカレイなど雑漁の帆待はあったが雇主や船頭は大いに見ていた。

漁夫盛漁期に入ると観光客が札幌市など近郊から曳網見學と「石狩鍋」賞味に訪れる。このころになるとヤン衆(石狩本町地区では東北地方から鮭場を云々。アイヌ語で「網」を「ヤ」。「ヤ衆」が訛って「ヤン衆」。(の「ハ、オイ」にも気合が入り、音頭(掛け声)の中にも即興で囃子たてたり、着飾った女子衆の一面が通ったりすると、ことさら気合を入れ、揚げ場(立元)に来ると「そら持って行け」と秋味の一本位投げたりしたものである。

昭和十年代の石狩本町地区は漁は薄くなったとはいえ、活気にあふれており初秋の石狩川は秋味の観光景気に沸き漁撈風景も風物詩になっていた。

柳田常義氏 大正十二年生 柳柳成曳場船頭
補考 田中實

参考文献
「北海道漁具調査附図」「定置漁具の部」
昭和十二年五月二十五日発行 北海道水産試験所編集
「北海道漁業志稿」(昭和十年編纂)

昭和五年五月一日発行 北海道水産協会編纂
「石狩漁業協同組合史」

二〇〇三・三・三十一 編纂者 田中實
「石狩町誌」中巻一

昭和六〇年三月二五日 石狩町発行
「いしかり」創立七五周年記念

昭和三七・一一・三発行 石狩漁業協同組合
「北海道日本海漁撈漁具用語事典」

二〇〇三・一一・一五 著者 吉岡玉吉



では上り湖(厚田方向から鏡面方向)はあるが、沿岸部では少なく、この湖の流れを勘案して「型入れ」をする。

漁場間の距離は概ね一〇〇〇間(一五〇〇メートル)で、建場は前浜地先、約八〇〇間(一二〇〇メートル)、建口前水深約一五尋(二二・五メートル)に位置し設定する。

○漁場(建場)の許可
許可官庁、北海道庁、内容、浜鮭 明治四二年許可
昭和一〇(一九三三)年代では、これを踏襲。名義変更または許可(漁業権)を借用して操業した。建網の位置の設定は、陸地に元標(もとじょう)と副標で固定し、その場に直線に標識柱(びょうしきちゅう) 丸太二本を立て、沖合から計測して「型入れ」、艇網、手網(垣網)の順に投網する。

建場の変更は何年たってもすることはない。尚、漁場の評価を明治四〇(一九〇七)年代では見積価格を場所と漁獲高の善し悪しによつて六五〇、一万余りに評価していた。昭和一〇年代ではこのような制度はなく終止していた。

○使用漁船の状況(明治後期→大正、昭和三年頃まで)
鮭場では、「汲み船」「磯舟」の使用は明治年間の鮭豊漁時に「起し船」と共に一漁場で使用していたが、大正後期から昭和初期にかけて漁獲が少なくなり且、漁法の進歩により漁夫の削減、設備の縮小化によつて「起し船」のみとなり、わずかに「型入れ」時に磯舟を用いる程度になっていた。

(1) 起し船(三半船) 一隻
小形のもの「保津船 ぼつづぶね」という。北海道の「三半船」は青森県の天当船(てんとうぶね)注1(系)のもので、向地(のぼり坂、その方面)の漁民が持ち込んだものであり、船体の構造は当初の無



柳作りで、幕末期には「四枚接ぎ」のもので出て来た。

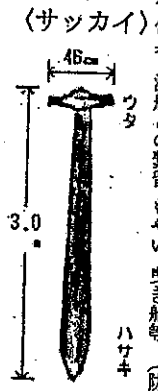
明治二〇年代になると「四枚接ぎ」のものが主力となって、主に練場・鮭場の定置網用の漁船として使用されるようになった。漁船が邪魔になり撤去し船体も用途によつて大小がある。

注1 天当船(てんとうぶね) 単に天当とも云う。
五枚板造りの漁船または運搬船。地方によつてその大小・構造など一定しないが、船名としては明治期に最も広く沿岸に普及した船。

○石狩浜吉田漁場の三半船(石狩浜では「さんばせん」と呼ぶ)
材質 杉、松材
長さ 四丈五尺(一三・五メートル)
幅 九尺(二・七メートル)
深さ 二尺三寸(六六センチ)

漕具 櫂(ともが)い 長さ 一丈六尺(四・八メートル) 二丁
早櫂(さつがい) 長さ 九尺(二・七メートル) 十二丁
早助(はやすけ) 長さ 一丈位(三メートル位) 二本
用途①網起しなどのとき浮標などを把持する。②岸辺で波による船の動揺を防ぐための支えの突つ返棒。
ヤサカギ 長さ 五尺位(一・五メートル位) 二本
用途、網起し時、上ストの網の一端を取り上げる時の鉤。

早物 長さ 三五尋位(五二・五メートル位) 二本
マニラロープ、径五分(一・五センチ)
用途、非常用常備具。漁船との繋留もやい、曳き船等。(防災・救助用)



(2) 汲み船(保津船、網結き船)「あみたきぶね」とも云う) 一隻
材質 起し船と同じ
長さ 四丈三尺(一三・七メートル)
幅 八尺(二・四メートル)
深さ 二尺一寸(六三センチ)

以下、起し船と同じであるが、漕具中の早櫂は八丁→一〇丁。
注、昭和一〇(一九三三)年以降は事業縮小のため各建場では配置せず、一部では「型入れ」時に使用していた建場はあった。

(3) 磯舟(四枚接ぎ) 二人乗り 一隻
長さ 二丈一尺(六・二メートル)
幅 二尺八寸(八三センチ)
深さ 一尺二寸(三六センチ)
漕具 車櫂(くるまがい) 長さ 一丈二尺(三・六メートル) 二丁
練櫂(ねりがい) 長さ 一丈(三メートル) 二丁

注、練櫂は早櫂と同様造りであるが、磯舟の左側櫂に種曳(かひびき)をくけ櫂を刺し込み漕船する。

早物 長さ 二〇尋(三〇メートル) 一本
マニラロープ 径四分(一・二センチ)、
「型入れ」「網結」時が主な活動した舟であったが、昭和二〇年以降は「型入れ」以外は使われなかった。

○漁撈従事者と役人(やくびと)その他の役割り
全盛期であった明治中期から大正前期頃までは、大船頭 一、船頭 三(二下船頭・網起し船頭・表船頭)、表 一、磯舟乗り 二、こごまで役人、他漁夫 三〇人、合計三七人程度であり、他には陸では「帳場(カンビ)」「陸廻り」「飯炊き」の配置があった。
昭和一〇(一九三三)年代になると、漁具類の発達に比して回遊す

る魚族の減少、人件費の高騰などで八人から十二人くらいで操業した。

○役人その他の役割り

全盛期(明治二〇「二八八七」年頃)
○大船頭 漁夫・雇夫・出面取等を指導し漁獲に従事する。
○カンビ 帳場、会計を掌るもの。給料不定。
○起し船頭 大船頭を補佐し網起しの指揮を執る。
○下船頭 大船頭・起し船頭を補佐し、漁夫に出船・入船の漕船の指揮を執る。

○表船頭 大船頭を補佐し、出船・入船時の船内の意志統一を図る。
○磯舟乗り 「型入り」時、型入れ三半船を補佐し、作業を円滑に進める。網建時、率先出漁し「型」の正常か否かを調べ網建を容易にする。網建終了後、常に正常であるかどうかを見廻る。
注、年若く風強で頭腦明晰な若衆船頭になれるような者が当たる。

○表係 出船・入船時、船(みよし)に位置し船の進行に注意し、網起し時に円滑に網起し出来るよう采配する。(手練網などの操作)
○若者頭 漁に精通し漁夫から信頼されている漁夫が、網卸しなどで選任される。年配者でも当てられる。切り上げ時、漁夫と同一賃金だが「九一」分配時に評価される。

この外、役人ではないが、一般漁夫の熟練した者の中から「道具掛り」「夜番 やばん」「陸廻り おかまわり」が選ばれていた。又、番屋には「ガンビ」(注、主としてニシン場の帳場を云うが、サケ場の帳場をも云う)の他、食事の世話をする「飯炊き ままたき」(注)「めしたき」「なべ」とも云う。「大鍋 だいなべ」炊事係の長「鍋」炊事係)が配置されていた。
尚、陸廻りの中に老年熟練者を「切倉掛 きりぞうがかり」獲れた

条宛三条。

次は一問一尺(一・八メートル)間隔に胴張り中央一条とし胴張り中央より同じく一問一尺(一・八メートル)間隔に一条。
次は尻スド付側まで七問二尺(二・二メートル)間隔に一条宛四条、計九条。

尻スド付側には六問一尺(九・四メートル)間隔に沖方四条、陸方五条、計九条。

尻スド立場には側の碇綱より三問(四・八メートル)を隔て一六問(二・四メートル)間に上スド同様二三条。

以上合計六八条。

イ、碇根綱(いかりねづな)

葉綱六寸(九センチ)長さ一四問(二・二メートル)一条を蛙股(かえるまた)注)として各掛綱の先に使う。

注、蛙股

網地を編むときの結び目(結び方)の一種。固くてずれなく、網目がよく開くので刺し網に用いる。

ウ、垣網の掛綱

身網の掛綱と碇根綱を上スド側に沖端より間隔五〇間(七・五七メートル)毎に一条宛、計一〇条。垣網陸側末端にはワイヤロープ径六分(一・八センチ)長さ三〇間(四・五五メートル)それより五〇間(七・五八メートル)のところに掛綱と同じものを二条宛に用いる。

エ、垣網(手網)根綱

身網の根綱と同じものを使う。

オ、垣網(手網)の管綱(くだづな)

マニラロープ径七分(二・一センチ)一条を沖端三角網の斜辺(注)に用いる。

注、斜辺

直角三角形の直角に対する辺

厚を三寸(九センチ)のものを四寸(一一センチ)間隔に一個宛付け
ウ、見返しの浮子

内登りの浮子と同じ。

エ、障子の浮子

見返しの浮子と同じ。

オ、蓋網の浮子

障子の浮子と同じ。四尺(一一メートル)間隔に一個宛付ける。

カ、障子開き網の浮子

身網型網の浮子と同じものと蓋網の浮子と同じものを各三個宛付け
キ、胴渡し網

障子開き網の浮子と同じもの。

ク、口前渡し網の浮子

胴渡し網の浮子と同じもの。上スド付に四個、尻スド付に六個を各等間隔に付ける。

ケ、垣網の浮子

材質、撥松。長さ二五尺(七・五八センチ)幅四寸(一一センチ)厚さ三寸(九センチ)のもの。一脇より二八〇間(四・二四メートル)間には間隔三尺(九センチ)、次の二八〇間(四・二四メートル)には間隔三・五尺(一一メートル)、残り四〇間には間隔四尺(一一六メートル)に結び付ける。

但し、陸側の末端には三つ穴のダンブ一個を使う。

コ、三つ穴ダンブ(浮子)

材質、撥松。一問一尺(一・八メートル)径二・二尺(三六センチ)のものを身網部型網各碇綱の付根に結び付ける。

サ、垣網掛け網のダンブ

硝子玉。径一・二尺(三六・四センチ)一個を型網より一問二寸五分

傾斜した辺

カ、垣網(手網)のサカサ(逆さ)網

マニラロープ、長さ水深より五尺(一・五メートル)増を一脇前縁より二〇間(三・〇三メートル)まで間隔五間(七・六メートル)とし、それより各両側に付ける。

尚、マニラロープ一条宛一〇〇間(二・五〇メートル)毎に足揚げ網として用いる。

(三) 浮子網(ダンブ網)

(一) 身網の浮子網

マニラロープ径四分(一一センチ)を左右障子網・内登り側網・見返し天井網前縁及び蓋網に用いる。

(二) 沈子網(あしづな)

注、おもりに「堅」・「五」などで作る。

ア、身網の沈子網

葉綱、径一寸五分(四・五センチ)をマトモ尻スド立場上側網・沖陸障子網及び外登敷(がいとうずき)の前縁に用いる。

イ、垣網の沈子網

身網の沈子網を全沈子方(あしかた)に用いる。

〇浮子の部(ところ)によっては「ダンブ」と呼称する(ア、身網型網の浮子)

材質、撥松。一問一尺(一・八メートル)幅八寸(二四センチ)厚さ三寸(九センチ)のものを上・尻スド部を除いて各三つ穴ダンブの間に三個宛(登り渡し網の両脇には四個宛)三つ穴ダンブと同じ方法で結びつける。

イ、内登り浮子

材質、撥松。長さ二五尺(七・五八センチ)幅四寸(一一センチ)

(二・二五メートル)のところにづける。(但し、沖より碇綱八本のものとす。)

〇沈子の部(あし)(一名ナツ石ともいう)

ア、身網の沈子

自然石。重量二〇〇匁(七五グラム)のものを外登り敷の前縁には三尺(九センチ)間隔に一個宛。マトモ網及び障子網には五尺(一・五メートル)間隔に一個宛結び付ける。

外マトモ網の中央障子網前縁部、尻スド側網、障子網など計八個づける。

イ、垣網の沈子

自然石。重量二〇〇匁(七五グラム)のものを五尺(一・五メートル)間隔に付ける。

ウ、垣網の沈石(ちんせき)(キンクマ石、ダンブ石)

自然石。重量八匁目(三〇キロ)のもの一個を三角網下方に付ける。

エ、各部の碇綱の土俵

米俵又は建ムシロの小砂利(砂)を詰め、重量五〇貫(一八七・五キ

ロ)、建ムシロの場合は七〇貫(二六・二五キロ)のものを各碇綱に

米俵の場合は一〇俵、即ち根綱一条に各五俵宛、建ムシロでは六俵、

根綱一条に三俵を沈める。

オ、障子網サカサ網の土俵

米俵五俵。建ムシロの場合は三俵。

カ、垣網サカサ網の土俵

米俵五俵。建ムシロの場合は三俵。

キ、三つ穴ダンブの土俵

米俵五俵。建ムシロの場合は三俵。

ク、三つ穴ダンブの土俵

米俵五俵。建ムシロの場合は三俵。

〇漁法

一、型入れ

型を敷設する時は先に身網部の型を入れ、その後に垣網(手網)

○建場の設定及び「型入れ」の状況(その二)

注、昭和二三(一九三八)年九月乗り込み時 吉田漁場
建場、許可されている建場の隣接漁場との距離は概ね一〇〇〇間(二五〇メートル)、沖合は八〇〇間(二二〇メートル)と設定されており、これに従って「型入れ」を実施する。

○「型入れ」作業は例年のことと一日程度で終わるが、型を固定する土俵造り(石狩浜では建ムシロ吹(かます)に砂詰)は三日位かかった。

○「型入れ」資材関係

○型網関係

ワイヤロープ径六分(一・八センチ)にグリス注、摩擦の多いところにつける。ねばりのある油(油)をかけ白木綿で巻く。長さ一辺四〇間(六〇メートル)二条、幅部分一五間(二二・四メートル)二条。

○神居網(垣網)からの延長線、角網の中心

マニラロープ径八分(二・四センチ)、身網網中心付根より沖合一五間(二二・五メートル)延ばし、その付根から二股に更に十五間(二二・五メートル)延ばして先端に夫々土俵三俵宛(計六俵)投入固定する。各土俵は藻網(縄)で中心部を締め神居網に結び付ける。

注、土俵、建ムシロで米俵状に吹(かます)を造り石狩浜では砂詰め。セ〇(前後後)二六(二五キロ位)

注、藻網、藻縄ともいう。既存の完縄を三本 五本を「ギッチョ」(網打ち機)で左回転して縫った縄。マニラロープなど出始めても練・蛙・鯉場の定置網では重要な根網用として使用。安価で仕上げることが出来る。

厚田浜などでは「型入れ」前に番屋の前の干場(広場)で五、六名の漁夫が「ギッチョ」を廻して作っていた。二三日も続き、練場・鯉場の

前哨戦の一戦として賑わいを見せる作業であった。

○根網及び根ダンブ(浮標)

○型網部(みあみぶ)
マニラロープ径八分(二・四センチ)長さ二〇間(三〇メートル)八条。根ダンブ(浮標)長さ五尺(一・五メートル)幅一・二尺(三六センチ)厚さ六寸(一八センチ)八個、上スド、尻スドの四角から一間(一五メートル)の根網に取り付け浮力を保つ。

土俵は各根網の先端に夫々三俵宛投入し型網を固定する。セ〇(二六(二五キロ)計二四俵)。

○神居ダンブ(浮標)

材質、椴松。長さ六尺(一・八メートル)幅一・三尺(三九センチ)厚さ七寸(二二センチ)、型網網中心付根から一間半(二二・五メートル)離して取り付け神居網、型網型網などの浮力を保つ。

○垣網(手網)型網(根網)及び根ダンブ(浮標)
マニラロープ径八分(二・四センチ)、長さ二〇間(三〇メートル)一五間(二二・五メートル)二〇条、(一脇一五脇)垣網(手網)型網全長二〇〇間(二二〇メートル)、マニラロープ径八分(二・四センチ)間に間隔四〇間(六〇メートル)ごとに根網を張り、垣網型網付根から一間半(二二・五メートル)離し、根ダンブ(浮標)長さ一間(一五メートル)幅一尺八寸(三六センチ)厚さ六寸(一八センチ)を夫々一個(計一〇個)を取り付け型網浮力とする。

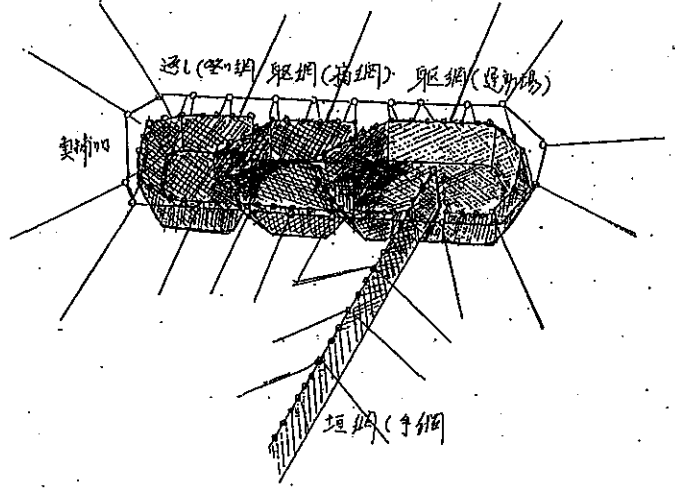
根網末端には各条、土俵二俵(計二〇俵)、三脇使用では二俵を投入し固定する。

○手繰り網(てぐり網ともいう)

型網の上スドから尻スドまでの四〇間(六〇メートル)の間上下にマニラロープ径八分(二・四センチ)を張り、網起しの際し風や潮の流れに従いされない様に漁夫一名が「網起し」の具合を見ながら

操作し、起し船の平均を保つための整係網。

○型網の構造(図表二の2図参照)
綿糸二〇番手四寸目(二二センチ)



長さ四〇間(六〇メートル) 幅一五間(二二・五メートル) 網丈八間(二二メートル)

○口前垂網(くちまゑなだれあみ)(図表二の2図参照)
単に「前垂網」ともいう。型網の口前内に前垂状にたらし型網に入つた魚が外に出るのを防ぐ仕掛け網。長さ五間(七・五メートル)網丈八間(二二メートル)、型網に付随して設置されている。

○垣網(手網)(図一図参照)

注、石狩市三地区では明治時代から手網と呼称する。その建場によって長さ二〇間(一九五メートル)から二五〇間(三七五メートル)位まであった。

吉田漁場

網目一脇、綿糸二〇番手五寸目(一五センチ)五〇掛け
一脇三三間(四九・五メートル)、二脇三三間(四八メートル)、三脇三三間(四八メートル)、四脇三〇間(四五メートル)、五脇葉網目(黄子縄)みごなわ(三〇間(四五メートル))注、四脇も黄子縄網のこともある。網目一尺(三〇センチ) 合計長さ一五七間(二三五・五メートル)。

○網起しの状況

昭和一〇(一九三五)年代 前浜 吉田漁場
角網の網起しは起し船に船頭以下二、三人によって行われる。通常「朝起し」(午前六時前後)「昼起し」(午前十一時頃)「夜起し」(夕方、午後六時前後)の三回で行われるが、盛漁期の「走り漁」の回遊期では、朝夕の他に午前一〇時、午後三時の二回を入れて五回で行われていた。

要領は、上スド側から手繰り網を操作する者二名(沖側一、陸側一)が配置に付き起し船を型網に直角にして網を手繰って、袋網、魚捕り網方向に「網起し」の掛け声(近年は網起し音頭というが)を齊一し

て進める。

注、網起しの掛け声、網起し音頭（資料一参照）

起し始めは、エサ、ヨイヤ、オコイシヨなど単声で声を揃えながら進めて行くが、最終段階で乗網した魚を汲み始めたは自船（起し船）に汲み入れるときの切り声を音頭という。

昭和十一年代は網起し途上の発声は「掛け声」、網から魚を上げる時の声「した掛け声」「切り声」と云った。（資料一参照）

鮭が多量に乗網したときは汲み船を尻ストドに配置して小分けし切り声を掛けて汲み船に揚げるが、昭和一〇年代では魚影は茫く起し船に小分けして揚げるが多かった。

初秋の朝夕、網起しの出船のとき、小樽高島岬に夕日が海に紺碧に輝いて漁夫が奏でるハオイ（別紙二図参照）が波響に乗って遠近に聞こえる様は石狩浜の風物詩の一つでもあった。

話者 吉田忠夫 昭和二年生 親船町

おわりに

石狩川で産湯を遣ったものとして、「サケ」と都会風というより、走り魚（九月、一〇月）はアキヤジ、後取り魚（十一月、十二月）は「鼻曲り」、「フナ」、「フナケ」雄は「カン」と呼ぶのが石狩平野の河口街に相応しい、と自負するところです。

魚の獲り方も、この頃（昭和一〇・一九三五年代）では、「流し網」に始って「刺し網」「地曳網」「定置網」「角網」と一連の漁法で終始した。このような漁業で栄えた歴史の街を御当地に住む人々に伝えて行くことも意義あると、鮭漁法、角網（建網）の一端を書留した次第です。充分なものではないので今後、尚研鑽して纏めて見たいと思います。本稿については、先達研究者やこの漁に携わった人々の智慧を拝借し、また微細な体験を元にしたもので相違するところがあれば御叱責下さい。これ御教授いただければ幸甚とするところでありませう。

話者 吉田忠夫 昭和二年生 親船町 完

○参考文献

- 「北海道漁業志稿」一九三五年 北水協会
- 北海道漁具調査、定置漁具の部 昭和二年五月二日 北海道水産試験場
- 石狩町誌中巻二 平成三年三月三十一日 石狩町
- 浜益村史 昭和五年三月 浜益村
- ニシン文化史 一九八六・七・一〇 今田光夫 著
- 石狩漁業協同組合史 二〇〇二・三・三一 石狩漁業協同組合
- 北海道日本海漁場漁具用語事典 二〇〇三・二・二五 自家版 吉岡玉吉

資料一「網起し音頭」

網起し囃子 明治三八（一九〇五）年 浜益村

上段 先導者

一般漁夫

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

ヤーンシヨイヤ

資料二「船漕ぎ音頭」通称「ハオイ」

船漕ぎ囃子（近代船漕ぎ音頭）

ハオイ 上段 先導者

オースコー

オラーオー

オコイシヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ

ホーラーオー

オコイヨ



二、所謂河川地引網漁の様子。
 下段絵、近景は、海浜漁の様子と史料する。二つに区切って摘要を述べる。

①右絵、画面向かって右側部分。
 地曳網が手繰り上がり。大網を清め(さやめ、ここでは鮭の選別作業)、漁夫が板倉(塩切場)に運ぶ様子。(図2)その左側では一人の漁夫が左手で網を清り(さより、修整)している。三半船の船では、船頭らしい人が櫓を立って持っている。(注3)
 高い四角中の柱には、一面に「札幌縣廳七里石狩國石狩郡石狩驛」もう一面には「篠路驛江三里貳拾壹町 鏡函驛江五里拾町」とある。駅逓の標柱である。

この標柱を挟んで一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振っている素振り、鮭の大漁を喜んでる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。とぐろを巻いているように見えるのは、引き網の入網か。ただし、河川漁の入網は、ふつう七〇尋(一〇五メートル)で、描かれている網は長すぎる。(注4)手前に帽子を被り棒を持っている人物は羅卒(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと史料する。

②左絵、網を引いている図
 携わっているのは漁夫十一人。良く描かれているように思うが、網の左右の人数がほぼ同数となっている。実際は網の上部(アバタナ)は軽く、網の下部(アシタナ)が重い。(錘がついている)そのため下部に多くの人数がつく。(注5)地曳網は、中央(袋網の入口)にある「神威浮子(カモイダンブ)」から右側を入網(いりあみ、左側を出網(であみ)という。その先端につくのが入網側は入網(いりづな)、出網側を出網(でづな)という。(図3)この絵は入網を手繰っているところと思うが、網は川の中で途切れとこ

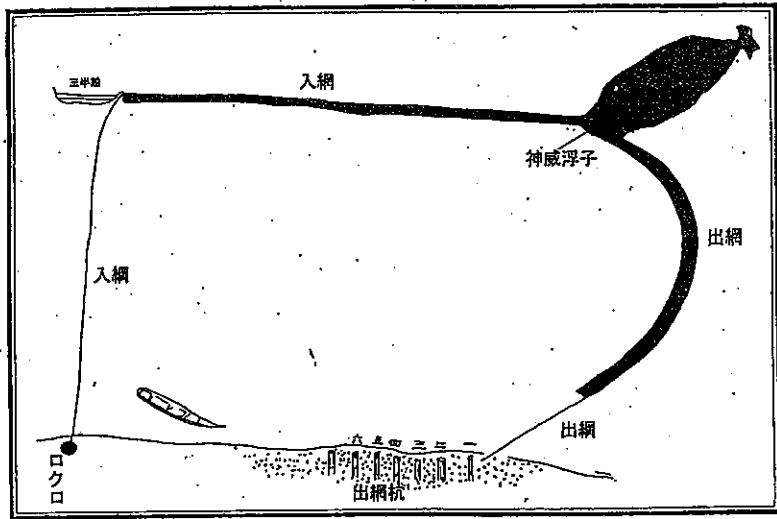


図3 河川での地曳網漁(北海道水産協会編1935を改変)

にも繋がっていない。
 網の先にいる磯舟の一人が、水中に手を入れて、網の引き具

合を見ているか、袋網の状態も見ているのか。(図5)あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。磯舟の前に白くなっており、網が入った鮭がはねている様子を表現しているの

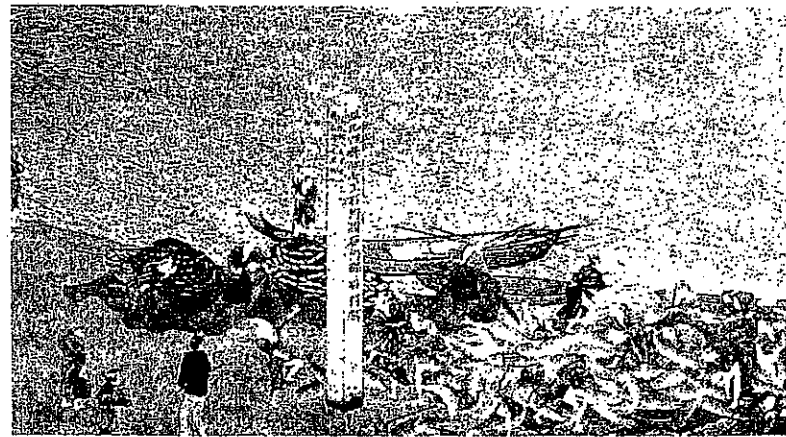


図2 鮭の清り(選別)



図4 浮子手網(アバタチ)

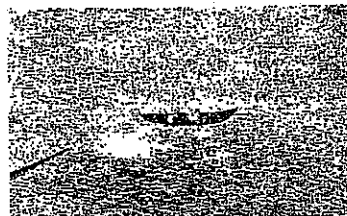


図5 神威浮子(カムイダンブ)

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸向かって消えていく。網につな

ていけば、最後の段階の絵になるのだが。

その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理している様子である。(図4)ただし、これも河川漁としては網が長すぎる。また、河川漁の場合、一日に十三〜十五河(回)も引き網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

③入網をロクロで巻いている図
 網掛船(三半船)で沖合に網をかけ、ロクロ(注6)で巻いている。十八人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六〜七人で充分。(図6)

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りという。ロクロに二〜三廻りしてロープを掛けているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタツブ網は上がってこない。網は、磯舟につながら、さらに磯舟から岸につな

ているが、エケ所の漁場で、同時にこのような作業をすることはない。
一連の作業を示すための演出だろう。

②網の規模

最初に見たときに海浜漁の様子を描かれているのではないかと
印象を持った。描かれている網が河川漁としては長すぎるし、片付
け方もおかしい。ロタロを十人で回しているが、河川漁としては多
い。三半船のつなぎ方の海でのやり方である。海浜で行う大網の様
子を川漁として描いているように見える。

四、おわりに

以上、石狩の漁業者の目で「石狩川鮭漁」の図を見てきた。これま
で述べたようにこの絵は、ありのままの様子を描いた単なる風景画で
はなく、鮭漁のさまざまな様子をひとつの画面に書き込んだもののよ
うである。作者は、個々の作業内容だけでなく、全体にどのような手
順で地曳網が行われるのかを理解して描いている。おそらく実際に鮭
漁中の石狩に滞在して鮭漁を調べた上で、描いたものであろう。しか
し、一部に海での地曳網の様子を河川漁のものとして描いている部分
が見られる。

解説「石狩川鮭漁」の図について

「石狩川鮭漁」の図は、明治初期の石狩川河口における鮭漁の様子
を描写した絵で、石狩市の観光ポスターにも用いられるなど比較的良
く知られている。大きさは、縦百三十一センチ幅百七十一センチ。作
者や製作年などの記録は残っていない。

戦前から北海道史研究者には、明治初期の鮭漁の様子を描写した絵
として知られ、北海道庁道史編纂主任だった竹内運平の「北海道史要
」に「石狩川鮭漁之図 札幌博物館所蔵」として紹介されている。
注9) 続いて「新撰北海道史」第一巻でも「石狩川口辺の鮭漁」と

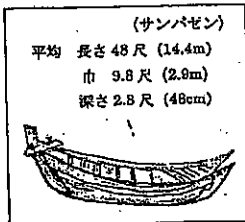
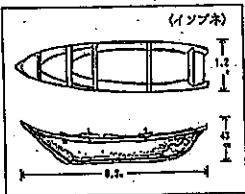
である。この二つの画風は、一見、同一人物の作品とは思えないほど
全く異なる。前者は、先の厚田のアイヌ鮭漁の版画と共通点が多く、
後者の画風は、石狩川鮭漁の図に近い。

明治二十年台以降の作品の特定も進められているが、開拓使時代の
画業の特定は難しく今後の課題となっている。(注16)

北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園及び同佐藤克孝芸
員には、資料の検索、使用について便宜をはかっていただきました。
また、後藤優美子氏には、栗田鉄馬についてご教示いただきました。
心より感謝を申し上げます。

(工藤義術)

注1 磯舟(イソフネ)と三半船(サンパセン) 吉岡正吉 二〇〇三 北海道
日本海漁業用具用語集より



注2 トクビタラ(トクビタ 徳盛) 新しく出来た川原。水田方正 一八九

注3 清り。「キヨル」「キユル」「キヨリ」とも発音していた。網を修繕する
の意。語源は清める。網がやぶれた場合、網針又はアンソ(糸)をもつ
て修理する作業の意である。なお大きくやぶれた場合、同目の網を用い

して掲載されている。(注10)

この絵の製作年などに関する記録は残っていないが、画面右下に描
かれた標柱に「距札幌縣庁七里石狩國石狩郡石狩驛」と書かれており、
明治十五(一八八二)年から明治十九(一八八六)年までの、いわゆ
る三県一府時代に完成したものと考えられる。

作者は、未詳とされているが、北海道大学が所蔵する「北海道後志
国高島郡漁場全図」と描かれた時期、大きさがほぼ同じで、内容的に
も鮭漁と鮭漁という対になるものであるため、同一の作者による作品
である可能性がある。

この「北海道後志国高島郡漁場全図」の作者は、北海道開拓使の画
工、栗田鉄馬とされている。(注11)

栗田鉄馬は、天保九(一八三八)年生、大正六(一九一七)年没。
香仙と号した。会津に生まれ、戊辰戦争後「会津降伏人」として小樽
に移住した。その後、余市郡に転じた後、明治十一年九月開拓使札幌
本庁民事局勸業課の画工として採用された。栗田がいつまで開拓使に
在職していたのかははっきりしていない。栗田は、明治二十年代から
三十年代にかけてアイヌや札幌神社を題材とした石版画の原面を描い
たことでも知られている。また太子流の剣術家としても知られ、新撰
組の永倉新八郎と交友もあった。(注12)

近年の研究により、開拓使時代の栗田鉄馬は、明治十三年に厚田の
樺太アイヌの漁業の様子を模写するよう命じられていた可能性が高い
ことが分っている。(注13)

厚田のアイヌの鮭漁を描いた版画(注14)の存在は、これまで研究
者間で知られていたが、改めてこの版画と栗田鉄馬との関係を検討し
なければならぬであろう。

栗田の画風は、大きく分けて二通りある。「北海道土人会話」
(注14)などに見られるような線の太い版画と「官幣中社札幌神社神
輿市街巡幸之図」(注15)に代表される日本画を基礎にした細密な画風

でタンポを入れるといふ。

「サヤメル」清める「整理する」の意。語源は、「さやむ」(け
がれを去る、きよめる)という語があり、これが転訛したものでない
かと思料する。延縄漁や刺網漁から作り、延縄又は刺網を整理すること
を「サヤメル」と言ふ。道南地方で多く使われているが、西海岸はもと
より全道一円の海岸で使用されている海岸方言である。

注4 大網は、海浜漁と河川漁では規模が異なる。

・海浜漁。長さ一五〇〇等(一五五尺・二三五〇メートル)。一日大漁
の時は一河(ヒトカワ)一回の意。普通二河。一場所(ケ統)ケ統一
〇〇―三〇〇△地曳網または引き網ともいう。(このころ浜では引き網
と呼ぶ)

注5 河内地曳網引き網。長さ二五〇等(二八メートル)。一日十三河
・十五河。一場所(ケ統)ケ統五〇人位、昭和に入り三〇人前後
・アンタナ「沈子手網」漁網の下縁部分の手網「タナ」のこと。広辞苑で
は沈子「しん」を付ける方を脚網「あしあは」と記述しているが、石
狩漁などの西海岸では沈子手網、又は脚網と記述している。呼称は、単
に「アシ」と書く。

注6 アバタナ「浮子手網」漁網の上縁部分の手網「タナ」のこと。辞書
は浮網と記述されているが、石狩漁や周辺海岸では浮子 手網と書き、
呼称は単に「アバ」「ウウタナ」「タナ」と言っていた。

注7 ロクロ 具(ヌテ取り)。石狩浜では石狩川のサケ地曳網場で昭和十年
(一九三五年)頃まで、この本器を用いて平常は六人、増水時には八人
一〇人で、沈子手網「アンタナ」係が「バイキ」(後退する、反対回
りをする)と声を張り上げながら作業していた。

注9 竹内運平 一九三三「北海道史要」市立函館図書館学術資料第2巻

注10 北海道 一九三七「新撰北海道史」第一巻 第三七四

注11 北海道開拓記念館 二〇〇二「描かれた北海道」第54回特別展図録
ただし、所蔵する北海道大学では、この絵の作者も未詳としている。



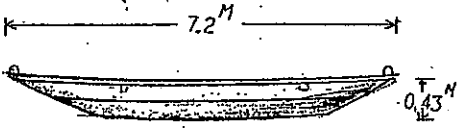
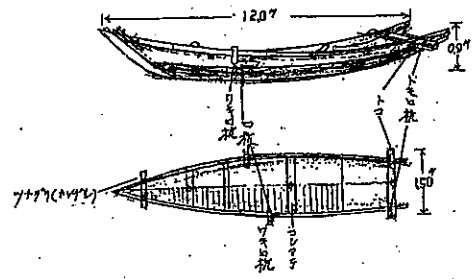
子(二人乗り)の鱈流し網漁、及び九月上旬から一〇月末日まで、右同様二人子(二人乗り)の鱈流し網漁(走り漁、並びに二月上旬から同末日までの同河面、河口上流部に於ける槽一丁、車權一双、二人子、鮭刺し網漁で使用。
 イ、五月初旬、八月下旬頃までの河面に於ける小型雑魚地曳網漁の、曳網船、早權(さっかい)二丁、槽二丁、三人子(三人乗り)(総員、三人、六人)
 ウ、夏季(五月、九月)の海面(前浜、西浜、十線浜)ホッキ巻(ホッキ小型桁網漁)、車權一双、一人子で使用。(春漁、秋漁)エ、六月上旬、八月下旬まで海面(十線浜、燈台下)小手繰り網漁の曳船とし、槽一丁、車權一丁、二人子で使用、帆走可能。
 ○製作船大工
 住所 氏名 仕事の特徴
 船場町 青木石松 仕事が奇麗、船形美しい
 新町 南甚一郎 のち造船所、堅牢(けんろう)船造り
 八幡町 若林清作 のち造船所、スマート操船容易、札幌市中島公園の貸ボート作製。奇麗。

○地域：厚田浜、浜益浜
 ○使用形態
 ア、三月中旬から五月下旬まで槽一丁、車權一双の二人子による鱈刺し網漁。漁業者一〇放(二〇放(二放五把)小漁師(零細)の業者が使用。
 イ、右同期間の建網(定置網)の先乗り磯舟。(乗組者は磯舟乗り、漁夫は役人、将来船頭になれる人物)
 建網(ともがい)一丁、車權一双、二人乗りで操船した。網を建てる時に一番先に出漁して型を調べたり、小廻りして連絡などの役目をする。

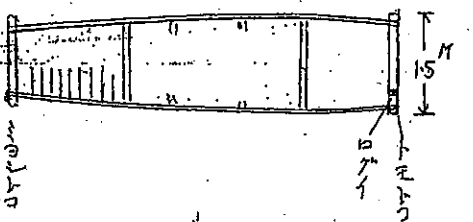
ウ、周年、海面で磯廻り(磯魚「カジカ、アブラコ、タナゴなど」と称して)車權一双、一人子(いちにんこ)で操船して漁をする磯舟。
 本種より尚、小型の磯舟もあった。いずれの舟も帆走設備を取り付け走行可能である。
 エ、例年七月二〇日解禁となり八月中旬まで操業する昆布採り(天草、銀杏草)採取のため、棹、車權、槽を、それぞれ一人子または二人子で操船した舟。
 ○製作船大工 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥
 厚田村船大工榎引繁太郎の祖父、(現造船業)
 昭和初期まで保津船(三平船)も製造していた。
 ○中型、俗称チロンコ(小廻りの利くところから)
 ○地域：石狩浜
 ○使用形態
 ア、二月初旬、末日まで、波あらい石狩川尻を基点魚に、車權一双、槽一丁による三人子で、一業者五放(一放三把)による鮭刺し網漁(後取り漁)。八六人の漁業者(昭和八年時)中、半数が、この場所で操業していた。川口周辺は回遊も多く最高、の漁場で、「チロンコ」が操業最盛の場所であった。
 イ、海面に於いては、五月、七月頃まで石狩川河口周辺から前浜(曹源寺下)付近までの間、車權一双、槽一丁、または槽二丁三人子による小型雑魚地曳網漁の曳船として使用。総員四、六人

○地域：厚田浜、浜益浜
 例年三月中旬、五月下旬、三丁槽(三人子)でニシン刺し網漁(二〇放、三〇放)。漁業者が「問い刺し網」「追いニシン」及び「沖揚げ」用として、次の大型シマイハギと共に使用した。主帆、船帆を取り付け帆走出来る。

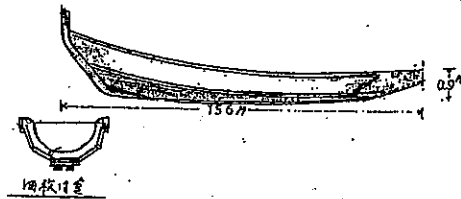
③ シマイハギ 大型



④ ヤツメ船(川船)



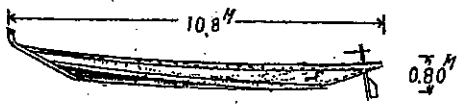
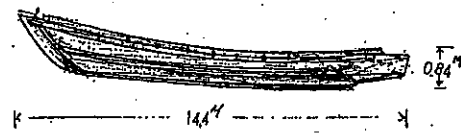
⑤ 三平船概要図



⑥ 保津船概要図



⑦ 川崎船概要図



好な船であった。主として帆走し船体は軽くスマートに造られており速力もあり、無動力時代の花形船であった。昭和七、八年頃では厚田浜、浜益浜でも二、三隻しか見られなかった。この頃、ニシン漁が終ると六月下旬頃から石狩湾内のいわし鱈流し網漁が始まり二〇キロ位帆走して漁をした。風のない時は三丁櫓、五丁櫓(三人一五人)で操船した。

○川崎船所有者
○石狩浜、吉田亀太郎(横町) 高島で接ぐ(造船)
○厚田浜、伊藤市文(別符) 川島某(本村)等があり八月頃の漁閉期には石狩湾沖合「丸山出し」(いしかり曆第二十一号)に操船練習(帆走訓練)を兼ね延縄漁(五目釣り)に出掛けたものである。なお川崎船の材料は殆んど杉材を使っていた。

弁財造り「小廻り船」改良発動機船(機帆船)
小廻り船。「余市生活文化発達史(史料二)」によると、本来は城下往來のごとく、本道では二百石積み以下の弁財で箱館、松前、江差間を往復していた荷船。
ア、積取り船の運行。

明治中期から大正末期頃まで船型、判然としないが、動力搭載による四・五〇屯の和船で、小樽港間を浜益村、厚田村に貨物積載の上、往來していたという。
イ、積取り船の運行。昭和一〇(一九三五)年以前は石狩を始め、厚田、浜益の物流は総べて海運に頼り小樽との交易が主で、船も内燃機関(無注水焼玉エンジン)が漸く普及し始めたころ、弁財造り「小廻り船」改良船に二〇〜三〇馬力の焼玉エンジンを搭載し小樽港との交易が盛んになった。御当地産物は小樽へ、小樽からは生活必需品から「漁具」種「筵」まで買入れられた。港のない厚田、浜益では乗架可能な「乗下船」(注)を考案し

て操業した。

海運業者
石狩町 和丸 三五屯、寺尾政次郎
八幡丸 二〇屯 平山良一
石狩丸 一九屯 宮下栄子
宝永丸 二〇屯 清野清八
船場町

厚田村
改良発動機船 乗下船
西田幸一郎 金田 (本村)
武田盛爾 (古澤)

注、乗下船。「シャフト」「スクリュー」を上げ下げ出来る仕掛けの船。和船改良の内燃機関(焼玉エンジンなど)を搭載の陸揚げ可能にした機動船。厚田村、浜益村で大正初期頃から漁港のない浜で運送を業とする者や漁家で資力のある者が弁財船を造り、「小廻り船」や「四合船」(注)を改良し内燃機関(二〇〜五馬力、焼玉エンジン)を備え、小樽港、石狩港、増毛港に海運などで往來し、操業後は前浜船場に乗架していた。
注、四合船。江戸後期、江差、松前、野辺地などにあつて、津軽海峽を往來した三〇〜一〇〇石ぐらいの小さな運送船。(広辞苑)

推定長さ二六尺(七・八メートル)〜三〇尺(九メートル)
船幅六一八尺(二・八〜二・一メートル)
乗組員八〜九人。
石狩場所まで二〇カ村から八〜九人乗り組んで九〇〇人ぐらい練場稼働に來た。

⑧ 小廻り船改良發動機船。 小型
弁財造り「小廻り船」改良機帆船参照

主として厚田、浜益村の鹹刺し網業者の大手（四〇放し五〇放以上）が登載し、主に管内の「追い鯨漁」に出向いていた和船。日常は自家の船揚場に乘架し、本村であれば、青島、小谷、古澤、横泊、安瀬、渡屋などに群衆があれば出漁した。各船は乗下船であった。
○弁財船所有者（厚田村）
佐藤、納谷、河島（本村）
伊藤、相澤（別符）

二、洋船

⑩ 近海運送船八幡丸など（洋船、機帆船）

小樽港、石狩港との諸物資搬送の他、北は留萌周辺からの生鯨買付け（粒買船）船として航海した。
○所有者、平岩良二 船場町

ア、昭和一九（一九四四）年八月石狩漁業協同組合が石狩支庁長の命を受け組合員一〇名、日大学生二名により、浜益村千代志別に細目昆布（火薬の原料）採取の勤勞奉仕のため磯舟二隻を曳航し出航、当時の輸送船として出動。
イ、昭和二五（一九五〇）年七月、釣り船業者ではないが、平岩氏からチャーターし厚田村ルーラン海岸に僚友一五名と「五百つり釣り」に就航した。

⑪ 北千島鮭鱈流し網「独航船」第一長栄丸

船籍港 石狩港
所有者 吉岡三之助 石狩町字横町
「独航船」とは、北洋の母船式鮭鱈流し網漁業、カニ漁業に母船会社などと契約して出漁した漁船。
昭和初期頃（昭七・八）昭二〇年まで、二〇一三〇噸前後の小型

船で北海道、東北地方から北洋漁場独航したところから名付く。

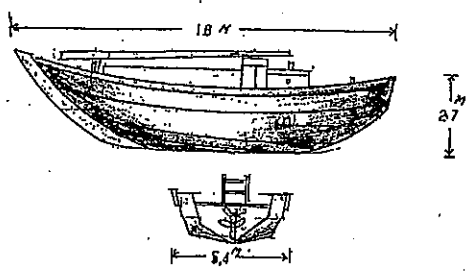
乗組員、漁撈長以下二二名、最大時二〇〇隻前後。漁期は六月一日（八月末日まで、石狩港からは例年五月二〇日（最高時二二隻）出港。留萌、稚内、香取、樺太、中知床半島に至ってオホーツク海を横断、北千島志林規島に進路を取り（根室から占守島まで約一、〇八〇キロ）二六日（六日間）で基地、占守島長崎の至着、即日出漁。石狩港（占守島長崎まで、約八五〇マイル）（一マイル約一、六〇九キロ）約一、三六八キロ 海上保安庁巡視船より）北千島より帰港後、一〇月上旬から南進船所（新町）乗架、翌三月中旬船下ろして五月、北千島に出漁するまで遠くは樺太西海岸から本州、秋田土崎港まで「粒買船」として航海

⑫ 粒買船第五長栄丸（北千島独航船）

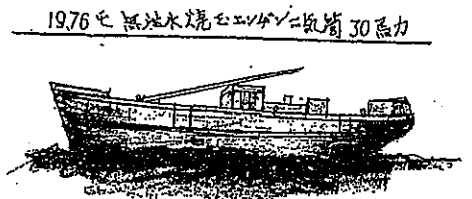
船籍港、所有者⑩と同じ、同型船、一二隻運航した。「粒買船」とは生ニシンを粒とらうところから名付く。
沿岸鮭漁場の建網（定置網）から直接買付け所定の港に運送する船。大きい船では一〇〇噸前後の「運搬船」もあるが、ばら積みのため下積みになるニシンは鮮度が落ち安価になる。
ダンブル（船倉）に投げ入れるので仕切り板を下積みし重力がかららないようにするには二〇噸から三〇噸級の機帆船が手ごろであった。

鯨の獲れ具合が北上するにつれ樺太西海岸まで積み込みに行く。前記第一長栄丸と共に、秋田土崎港まで利尻、札文島から「航海する年もあった。道内の「独航船」はもとより青森、岩手、福島など太平洋の「独航船」も日本海沿岸の「粒買船」として運航し、「ヤマセ」（南東の風）が強くとく日は満潮した「粒買船」が岸寄りして航海し、石狩湾では何一〇隻もの船が白波をかぶって進み陸（おか）で見ている人々が、「粒買船銀座」と囁いていた。五月に入ると船掃し待機、北洋漁業に出港したものである。

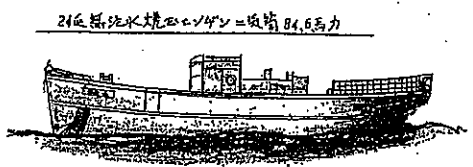
⑧ 弁財造り廻り船改良機帆船概要図



⑩ 近海運送船八幡丸概要図



⑪ 北千島鮭鱈流し網独航船第一長栄丸 概要図



狩三地区の冬期間は似合ぬ履物だった。男物が主。ク、ガツパ。木製の女子供用の履物。青森、秋田、岩手、宮城では、ぼくり(ホツクリ)。石巻(宮城)では水滑り用の履物。旧石狩本町ではガツパと云う人もいたが、昭和初期では下駄スケーと云った。

ケ、足袋。布(木綿、絹子)革で作る足首から下に履く物。労働用。防塵用。儀礼用あり。大小を文(一文銭を並べて敷えたところから足袋の衣の長さを計ったところから)で表した。市販されてはいたが、自家用で縫って履いた。男女共用。コ、ボツコ足袋。主として子供用の履物。靴下の前身。殆ど木綿生地。自家で縫って履かせた。

サ、タカジョー。秋田の地下足袋の方言。石狩三地区では昭和十年代までタカジョーと発音する人が多かった。地下足袋。直に土地を踏む足袋の意。丈夫な布と厚いゴム底からなる。主として労働用の足袋。水仕事には不向き。シ、ゴム長靴。ゴム製の靴。ゴムの文数によって短長あり。特長、左右に分かれて太股まである長靴。労働用。胸着、胸まである特長。漁撈用として使用。

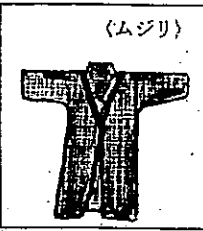
○着衣(着る物) 注、着る物。東北地方の方言。○下着。肌着類の作業衣

①漁夫一般。サラシ木綿(注1)の肌着。自家製。明治期から大正年間までメリヤスのシャツ、モモヒキ。晒の褲(下帯ともいう。白晒布、六尺、八尺)または越中褲。②大宅(おおやけ・親方の意)。(注2)メリンス(薄く柔らかく織った毛織物。スペイン語のシャツ、メリンスの股引またはコールテン)の股引(中高年の役付き漁夫も履くこともあった。真冬になるとシャツ、モモヒキの上にコットン(注3)の上下を

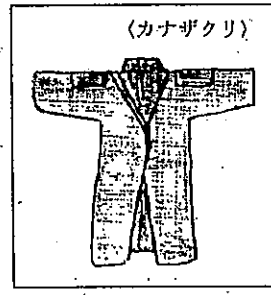
履く。昭和期になると冬期間や寒い外仕事の際は、ジャケツト(注4)やチョッキ(注5)を着るようになった。注1、サラシ木綿(晒し木綿)。さらして白くした綿布または麻布のことであるが現在では白木綿をいう。注2、大宅。おおやけ。金持ち。大家。ここでは資本家、大地主、親元、親方。この言い方は青森、秋田、新潟、富山、石川、福井、奈良地方にあり、この地方からの移住者によって伝えられた名詞である。注3、コットン。英語。棉花。綿糸。木綿。わた。カタン糸。木綿の布で作ったシャツやモモヒキのこと。注、カタン糸。ミンシンの用。木綿糸のこと。注4、ジャケツト。ジャケツトの略。英語。毛糸編みの袖の長い上衣の下に着る(一般には上着)もので、チョッキと同じように昭和に入り、毛糸が出廻り自家で編み冬期間に着るようになり、夏でも沖仕事の場合着る。漁業関係者はかりでなく、一般勤め人に普及して今日に至っている。注5、チョッキ。ポルトガル語。洋服の上衣の下に着る短い胸着。袖がなく胸、腹、背を被うもの。昭和初期毛糸が出廻り、労働用にも外出用にも使用した。特に操船(操縦)をする時、良好な衣類であった。若い者は明るい色、中高年者はグレー、紺、黒が一般的であった。

○上着 (一)作業衣 明治、大正期は活動しやすい袖や広袖の衣類が主だった。木綿の着長、刺子(注1)ムジリ(注2)ドンザ(注3)ツツレ(注4)サクリ(注5)等名詞の着物を用いられた。冬は二重刺しのムジリ。三地区ではこのうち、刺子、ムジリ、

と云う親子言葉まで流布した。ドンザ(ドンジャ)は青森、秋田、山形、岩手、福島、佐賀、宮城、北陸地方の仕事衣で、この地方から移住者によって普及された労働着であった。注4、ツツレ。チツレ、ツツレ(紙)。サンコチツレのこと。サクリや木綿衣を丈夫にしかも水を通さないように細く刺した着物。ハンチヤのものも多い。単に刺子ともいう。ツツレの解説としては、長着で袖なしの刺子をいう。青森(津軽)地方からの移入で、松前や松山、爾志(乙部)周辺で流行した刺子だが、石狩、厚田浜では羽織物のものをハンチヤと呼称した。注5、サクリ。さつくり(裂織)の転訛した名詞。木綿などのぼろ布を細く裂き、これを緯に麻糸や綿糸を経糸にして分厚い布で作った労働着。石狩三地区ではこのような労働着は総べてドンザ(ドンジャ)と呼んでいた。



注1、刺子。「刺子ちづれ」ともいう。綿布地を重ねて一面に針抜きに細く縫った着物。丈夫であるところから今日でも消防服、柔道、剣道衣などに用いられている。細かく縫っているのを水を通しにくく、水仕事をする漁師の着物として良好であった。全国一円の呼び名である。注2、ムジリ。ムジリ、テツボの略。筒袖(袂がなく全体が筒形に仕立てた袖のついた着物。つっぽともいう)の仕事着で、手仕事に便利。青森、秋田、岩手、福島(相馬)地方からの来道者によって普及された労働着である。注3、ドンザ。「ドンジャ」とも発音する。木綿地(多く紺地)の布を重ね細く刺してから仕立てあげた着物。刺子の一種。丈夫なので漁場の作業衣として多く用いられた。破れると小布をあて繕いをして何年も使え、少し位の水も通さない位丈夫な着物となっていた。



注6、メクラジ。盲地(盲織)縦糸横糸ともに紺染にした綿糸で織った木綿織物。足袋の表や法被(はつぴ)などに用いる。青森、紺無地。注7、カナゲサリ。丈夫なところが金鎖(鉄のくさり)からの異名か。厚地の紺木綿地で作った筒袖の着物。日本海西海岸の漁場に多かった。沖仕事より日常着ることが多かった。注8、業業服。木綿地の紺色労働服。和服(着物)から活動の便利になった西洋風の労働服。今日のジーンズ(撥染の綿布。仕事着などになっている服。英語)用の日常着にも着用。昭和初期に出廻り業の案の色

冬は木綿生地で作った綿入れテッカイシ、子供は小型のテッカイシに紐をつけ首から下げて掛けた。これらは統べて、その家の女子衆が呉服店からそれぞれ生地を買って来て夜べで手首など刺し、縫って掛けた。外出時は昭和期に入ってから手糸が出廻り一般家庭でも手縫みの手袋を作り掛けた。

注1、手掛け。男子衆の項で解説してあるが、木綿生地を裁断して二重刺しにして作る手袋。軍手は大正末期頃に出現した。だが石狩浜や厚田浜では刺した手掛けは手に合せて吹きよく、特に城坂など水仕事では手首を紐で結ぶようになっていて固定され脱げることなく作業が出来た。

注2、指みみ手。単に「こて」ともいう。「手甲」ともいう。木綿生地（紺色が主）を裁断して二重刺しにして指の第二関節まで出して作った指なしの手袋。縫仕事のごまめに手を動かすのに便利だった。

注3、手首。首サック用の作り。白木綿生地を指の太きと長きに裁断して細く先端から刺し筒を作り、親指、人指指、中指にはめ、端に紐一本をつけその紐を手首に固定する。指サックのこと。「ニシン漬す」作業用の指袋（サック）。ニシンの笹目（えら）、内臓を取り出すため考案されたもの。長時間、手掛けや軍手では手が疲れ能率があがらない。漬す人の指に合せて作っていた。

注4、腕買。主として紺木綿生地を腕の長さに裁断し筒状にして縫い上げる。作業する時腕や袖口がよれないようにするもの。市販のものもあったが、自家製のは屋外労働専用のものが主で、端に紐をつけ首から下げ、下がないように作った。

この四種はすべて自家製で漁期の冬場一月二十日正月から三月上旬まで、石狩本町地区から厚田村の極端、出漁する漁家（二十軒）以外でも作成するのが慣わしとなっていた。厚田村や浜益村の漁家で集場に来る人々の「ニシン漬し」用の手首（指サック）など何人分をも作っていた。

た火災のとき隣家（花田家など）二、三軒が屋根上に赤い腰巻を立てているの目撃した。各家は風上であり難を免れた。吹田家は母家と雑倉が全焼。我が家は風上隣家であったため類焼せず。

○上着

（1）仕事着は長着（ほとんど木綿生地で自家製）刺子、カシリ（紺紺注1）、ムジリ、テッポウ、ミズカ（注2）などを着て、木綿の三尺帯や手製の紐を締め、また手作り前垂れ（花模様、時に帆前掛け（注3））をして作業した。

また流し場に立つときは姉妹被り（注4）でタスキ掛けて立ち動いた。

注1、カスリ、紺。所々かすったように模様を織り出した織物または染模様。模様染め出したものを染め紺、模様を織ったものを織紺という。主として紺紺（紺地に白いかすりのある織物）であった。久留米紺などの木綿物。

注2、ミジカ。海岸方言。木綿生地のみぎまでの短い綿入れ。チャンチャンコより丈が長いもので冬期間の仕事着。男女共着る。

注3、帆前掛け。天竺木綿で作った前掛け。外見して帆に似ているところからの名詞である。大店や卸店、漁網漁具店等で宣伝を兼ね贈答用に作った前掛け。天竺木綿は、もとほインドから輸入したところから天竺木綿という。金巾（きんちや）よりやや厚手の白生地木綿織物で敷布、足袋地の裏地などとなっている。石狩本町地区では昭和十年代独航船（北千島雄勝漁船）の贈答用の大漁旗に多く使われていた。金巾はポルトガル語。堅くよった綿糸で目を堅く細く薄地に織った綿布。金布とも呼称する。（反物の普通より広い幅。約七五センチ大巾物のこと。鯨尺約二尺）。

注4、姉妹被り。女の手拭のかぶり方。手拭を中央前頂にあて、左右の端を角立てて後にまわし、その一端を頂上に折り返すだけ、またはその

て春を待つていたものである。

参考

洗剤のない時代の汚れ落とし。木炭灰。ニシン場仕事での汚れはゴタジル（注）など当時の洗剤では良く落ちない。むかしから伝えられている木炭による洗い落としが最も良好と、刺子やドンザまで洗われていた。四斗樽に木炭を多量（多い時は五分一位）に入れ、水を八分目位張攪拌し、その上水で洗うと汚れは落ちる。ドンザやムジリなど汚れたゴタジルも二、三日この水に潤すと汚れは奇麗に落ちた。物のない時代の洗濯水（劑）であった。注、ゴタジル（ゴタ）は塵芥。汚い塵芥のこと。

○下着

仕事する時は木綿生地の自家製の襦袢（注1）、昭和期に入るとメリヤスの肌着（シャツ）とモモとキ下は木綿の腰巻（注2）、冬はネルまたはメリンスのものを締める。脛には木綿の脚絆をはく。外室時はメリンスや木綿の襦袢、メリンスのシャツかモモヒキ、脛にはメリンスの脚絆をはいて外室した。

注1、襦袢。ジパンとも発音する。ポルトガル語。和服の下に着る肌着。注2、腰巻。御腰ともいう。主に白色、赤色、橙色等で木綿地の他、メリンス、ネル、羽二重などがあり殆ど自家製であったが、市販も羽二重などのものもあった。

参考

腰巻の火事払い。塵除け（火を悪魔とする）。火災の時、隣家の類焼を防ぐため。今まで締めていた腰巻をはずして竿に結び、屋根上にかざして火を払う。火はこのことによつてその家に移らないという。（筆者九才昭和九年六月ころ、厚田村字小谷村（吹田家）で発生し

すみを顔のところにはさむ。ねいさんかぶりともいう。

○外室着（上着のうち）

縮緬の肌着や襦袢を着る。上衣は紺紺またはメリンス、大島、御召縮緬（注1）ウール等の生地を自家で仕立てて（高級生地は仕立屋）着た。一般家庭の女子衆は木綿生地の着物が主で縮緬など大宅（網元）や勤め人の家族の外室着であった。

モンペ（注2）は大正時代からモモヒキの変形で着物の上からはくようになったがブルマ（注3）、パンツなどは昭和十（一九三五）年以降の普及であった。

和服の仕立ては専門の営業する人（和裁仕立者）もいたが、若い女子は和裁修得、嫁入り仕度として習熟するため漁期の一月、三月和裁教室や女子青年学校に通い習っていた。

当時、嫁入道具としては三種の神器（裁板、まな板のこおと、張板（注4）、新台（注5））と俗称される興入れ道具があった。漁家の家でも洗張りなども行なわれていた。

注1、御召縮緬。単に御召ともいう。もと貴人（地位、身分の高い人）が着用したことからという。縮緬の一種。練染（毛先を練った上で染めること。またそのもの）の絹糸を材料として織り上げたもの。微温湯（ぬるま湯）に入れて「しは」（しむ）を立てる。縞、無地、紋、錦紗などがある。

注2、モンペ。モッペ、モンペともいう。袴の形をした足首のくくれている股引。保温用または労働用に使用。雪袴ともいう。特に昭和十年代（太平洋戦争等）全国の女性の間に着物を解きモンペを作つて外出着にしてはいた。活動的な履物だった。

注3、ブルマ。ブルマーの略。英語。婦人、子供の下着。腰から膝までのパンツ。アメリカ人のブルマー夫人の考案した下着。

注4、張板。和服を洗濯する際に使う板。和服の洗濯は縫い目をほどいて

ばらばらにして洗う。洗い終わった布をこの板に貼り付けて乾かす。
〔洗い張り〕乾いた後に再び洗い直した。

注5、折台（くけだい）。裁縫用具。衣服などを仕立てる際、そのものたるまなひよう、その一端を糸で釣っておくための台。掛台ともいう。

〇足

かわじろ（注1）裏の紙付き足袋。夏はほとんど素足。冬は木綿の布二枚を重ねて底は細かく刺した自家製の足袋を大人も小人も履いた。

履には木綿地もあつたがメリンスの薄紺、エビ茶、桃色、薄茶色など、若い者程明るい色のケハン（脚絆）を当て、夏は下駄（上流は桐、普通は柳材）か草履。（厚田で藁草履が多かつた）冬は爪皮の下駄歯に金の滑り止。雪路は深沓（注2）を履いた。昭和に入つてからゴム製の長靴が出廻つたが、戦争たけなわとなりゴムが特需となり特別な方面の需要となり粗雑な雑言うとなしデンブ靴（注3）と名付いたゴム長靴を履いた。子供達も夏は素足に下駄、草履（藁製）や女の子はガツパ（注4）、冬は深沓からデンブ靴だつた。

注1、かわじろ。かわしるの訛。河内木綿のこと。河内国（大阪府の北中、南河内三部）に産する白木綿織。普通より地厚く女帯の芯、暖簾、足袋裏などに用いられた織物。

注2、深沓。藁製の長沓。冬、雪の中を歩くのに用いた。雪沓とも云つた。主に日本海沿岸地方に多く履かれた。ゴム長靴が出廻り廃れた。

注3、デンブ靴。澱粉靴。ゴム長靴の異名。ゴム長靴にデンブのような白い粉がついたように見えるのでこの名がついた。昭和二十年代前後、物のない時代配給になり履いたが、ゴムが粗材でびわれ破れ水もれ激しい履物だつた。

注4、ガツパ。ほつくりのこと。木で造つた履物。女児用の下駄。台の底をえぐり後側を円くし前部のめりにしたのも。多くは黒または朱の漆

を塗つていた。青森、秋田、宮城地方ではほつくりと呼称し、宮城の石巻地方では水清り用の履物をガツパと言つていた。石狩本町地区では女児用はガツパ。水清りや雪すべりは下駄に金具をつけて「下駄スカート」と呼んでいた。

〇用具防蹠用具など

仕事着では通常刺子やムジリなどの上にチャンチャンコを着るが、ハンチャを着ることもあつた。雨の日はボイルカッパ（注1）を着た。

（1）外出時、夏は厚刺しの刺子または唐傘（注2）。冬は角巻（注3）を羽織る。子供をおんぶしたときに着る亀の子（注4）やネンネコ（注5）などがあつた。

注1、ボイルカッパ。強くよりのかかつた糸で粗く平織にした薄地の織物。夏の婦人子供服やシャツに使用。この布地に荷油（エゴマ油）を塗つて雨具にした。

注2、唐傘。石狩三地区では番傘。紙張りの実用的（粗末）の雨傘。

注3、角巻。東北地方の女性の防蹠具。婦人用の防蹠用。四角い毛布のよちよちのついたもの。黒、紺、茶色が一般的で若い女子衆ほど明るい色のものを羽織つた。

注4、東北地方から移住者によつて普及した防蹠用具。亀の子。子供を背負う時防蹠のため羽織る神襦。通称、亀の子神襦。木綿またはメリンスの花模様（男の子は五月人形、船、金太郎、桃太郎など）の生地を綿入れ状に左右揃なく紐をつけ亀の子の形に仕立てる。亀の子の由来、亀の甲に似ているところからの形容名。

注5、ネンネコ。ネンネコ神襦の略。木綿またはメリンスの花模様などの生地を綿入れ幼児の着物状に仕立てたもの。赤ん坊を背負つた時、防蹠のため着る神襦。幼児語のネンネの転訛名。

おわりに

種々往時（明治中期、昭和初期）の石狩湾三地区漁場を中心とした労働者などを記述して来たところである。本町地区は知られておらず、おりに始まり練で開けた街。

漁場に携わつた人々の多くは東北地方（津軽東南部衆）を初め新潟を中心とする越中衆、越後衆であつた。

従つて衣食住もこの地方の習俗や方言も混在して定着した。衣を見るに刺子ひとつ取つても出身地の呼び名が使われて来た。

本稿にあつて多くの先達研究者によつて紹介されているところであるが、体験し着用した作業着など記憶のまま記述したまでのもの。内容に相違するところがあればご叱責ください。ご指導ご鞭撻下されれば幸甚です。

齢九十、手稻の自宅にて。

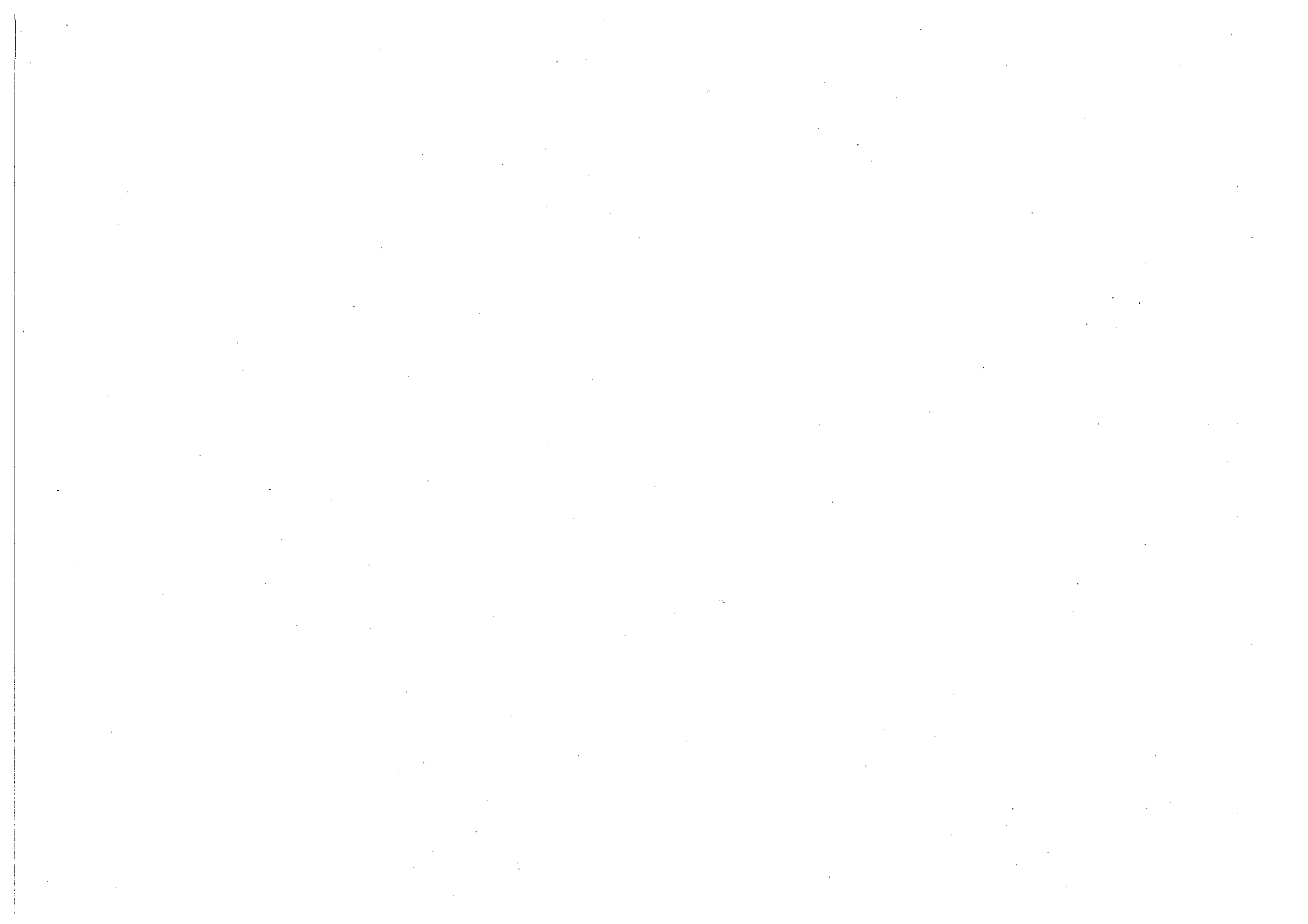
話者

- 吉岡 ヒデ 大正四年生 弁天町
- 吉田 ミヨ 明治三〇年生 横町
- 吉岡 タカ 明治三八年生 弁天町
- 真田 サダ 大正一〇年生 横町
- 鈴木 ナミ 大正一二年生 弁天町
- 広厚政次郎 明治二二年生 厚田村厚田
- 米田 ソヨ 明治一三年生 厚田村別所
- 伊藤 子代 明治一六年生 厚田村別所
- 有田 ヨネ 明治二〇年生 厚田村別所
- 伊藤 寅松 明治二四年生 厚田村別所
- 伊藤 ナミ 大正一一年生 厚田村別所
- 萩原 朝雄 明治三八年生 浜益村茂生
- 坂口 正美 大正二年生 浜益村尻苗

- 飛内 正一 明治二八年生 浜益村尻苗
- 中村甚三郎 明治四一年生 浜益村豊登
- 仲野 繁雄 大正一三年生 浜益村尻苗

参考文献

- 広辞苑
- 水産百科事典 一九七二 海文社
- 北海道郷土史辞典 一九六五 渡辺茂
- 北海道方言辞典 一九八三 石垣福雄
- 国語辞典 第二版 一九九五 岩波書店
- 古事ことわざ慣用語辞典 二〇〇〇 三省堂
- 山菜実用図鑑 一九九一 山岸喬ほか
- 新日本植物図鑑 一九八六 北陸社
- 北海道日本海漁場漁具事典 二〇〇三 吉岡圭吉



た「いや、わしの店が元祖だ」「そうでね、新聞記者だ」と交々。元祖は鮭漁を見物に来てアキアジ鍋を食べた観光客が味噌仕立の台(大)鍋(鍋料理)を食べ「石狩に行つてサケ鍋を食べて来た」「石狩のサケ鍋は美味」「石狩にサケ鍋を食べに行こう」と評判になって、いつしか観光客の間に「石狩鍋」の愛称が生れたとも推定される。余談になるが、昭和五八(一九八三)年九州に旅行し雲仙の旅館に宿をとった。世話してくれた仲居さんが「北海道は何処ですか?」と聞くので「石狩という町です」と答えると即座に「石狩鍋が有名ですわ」という。「石狩川」位が出てくるのかと思つていたら、九州の雲仙で石狩鍋が出るのは、驚くやら優越を感じた次第。

石狩市の名は石狩川と共に全国に知られており、河口の街、そして鮭の獲れる浜として昭和中期頃まで有名だった。
この様なところから観光客ばかりでなく多くの来町者が味噌仕立の鮭の鍋料理を食べ、独特の味わいからこの名が付けられたものと推断する。しかし、本町地区(親船町)の料理店(金村田彌五郎)が昭和二十(一九四五)年代初期から最も多く味噌仕立のアキアジ鍋を観光客に提供していたことから広く知られるようになったことは確かである。

三石狩鍋(アキアジ鍋)の変遷

ア、明治末期～大正時代
呼称 台鍋・ドンガラ鍋・アキアジ鍋
主に三平汁の変化したもので、アキアジの成魚は使わずピンコ(一尺六寸以下)メートル法では、四八センチ以下か、鮮度の落ちた慣れサケか、正月などで身卸したドンガラ(粗)を塩

味で作ったドンガラ汁であった。

素材 生鮭はほとんど使わず、塩鮭、新巻のドンガラと尾の部分。野菜(五升薯、ダイコン、にんじん、ハツバ)ダイコンの葉、ねぎなど。を入れ昆布だしの塩味で炊き上げるものを台鍋と言った。ドンガラのみではドンガラ汁、それに身が入るとアキアジ鍋と言った。

漁師の家では魚類は味噌味で食べなかった。街の人(漁師以外の人)は味噌味でも魚を食べていた。故、吉岡タケ 慶応四年生の話

イ、昭和十(一九三五)年代

注、この頃でも漁師の家では魚類の味噌料理は法度だった。また、祝事など以外成魚は食べず生きの下がったアキアジなどを捌き具にした。

呼称 台鍋、ドンガラ汁、三平汁、アキアジ鍋
素材、ドンガラ(頭、骨、内臓、通称 粗)
サケの切り身(ドンガラに入れるとアキアジ鍋)
野菜(ダイコン、ニンジン、キャベツ、玉ネギ、長ネギなど) 酒粕。

作り方、サケを身卸してぶつ切り、内臓とダイコン、ニンジンはイチョウ切り、玉ネギ、鍋に昆布を敷き、塩味でだし汁を入れて煮立ったらサケのおつ切り、内臓を入れ煮立ったら酒粕を適宜に加え、味をととのえて長ねぎを入れて出来上がり。
漁師以外の家では味噌味で作っており、両方共アキアジ鍋と言っていた。 話者 吉岡タケ

ウ、昭和二十(一九四五)年代

① 新巻のアキアジ鍋
素材 新巻鮭の身及び頭、骨または塩引き鮭の身及び頭。
野菜(五升薯、大根、人参、牛蒡、豆腐、コンニャク、長ねぎ、酒、塩、七味唐子、シヨウガ)
作り方 鮭類は一昼夜水につけ塩抜きして角切りにしてザルに上げておく。
五升薯は角切り、大根、人参はイチョウ切り、牛蒡はささがき、長ねぎははすに切る。豆腐、コンニャクはお好みの形。
鍋にカップ一杯(一人前として)の水を入れ、昆布だしで煮立て、鮭の身、頭、骨と野菜を入れて煮る。野菜がやわらかくなったら、豆腐、コンニャクを入れ、酒、塩、調味料を入れ味を整える。
長ねぎを入れ火を止め、七味唐子、シヨウガを入れて出来上がり。

話者 吉岡タケ
明治三八年生

② 生鮭のアキアジ鍋

素材 生鮭を三枚に卸し、身は角切り、ドンガラ(粗)は適宜切る。
野菜(大根、人参、白菜またはキャベツ、玉ネギ、長ねぎ、山椒、昆布だし、豆腐、コンニャク)
塩味の場合は酒粕または酒少量。

味噌仕立の場合は酒少量。

作り方 鍋に鮭を入れコンニャクを手でちぎって入れ、大根、人参はイチョウ切り、白菜またはキャベツを適宜に切って入れ、豆腐を入れ、昆布だしをそそぎ(塩仕立のときは酒粕をとく)味噌を酒少量でとき入れる。
煮立ったら、火を止める直前に山椒を入れて出来上がり。 話者 吉岡タケ

エ、昭和三十(一九五五)年代

注、塩仕立より、味噌仕立の生鮭による石狩鍋(アキアジ鍋)が大眾化され来町する人々は「サケ鍋」「アキアジ鍋」と呼称するより「石狩鍋」と呼ぶ人が多くなって来た。

素材 身卸したサケをぶつ切りまたは角切りにする。ドンガラ(粗)を適宜に切る。
筋子(バラコ) 白子、大根、人参、玉ネギ、白菜またはキャベツ、牛蒡、コンニャクまたはシラタキ、豆腐(好みに応じて)味噌、酒(少量)、砂糖(少量)、味の素(少量)
作り方 鉄鍋、土鍋に水を入れ昆布を敷き煮立ったら、サケの

注、これが石狩鍋と言われ始めた頃の原形でなかったか。

「五ノ字」
「六ノ字」

「七ノ字」
「八ノ字」

「九ノ字」
「十ノ字」

「十一ノ字」
「十二ノ字」

「十三ノ字」
「十四ノ字」

「十五ノ字」
「十六ノ字」

「十七ノ字」
「十八ノ字」

「十九ノ字」

「二十ノ字」
「二十一ノ字」

「二十二ノ字」
「二十三ノ字」

「二十四ノ字」
「二十五ノ字」

「二十六ノ字」
「二十七ノ字」

「二十八ノ字」
「二十九ノ字」

「三十ノ字」
「三十一ノ字」

「三十二ノ字」
「三十三ノ字」

「三十四ノ字」
「三十五ノ字」

「三十六ノ字」
「三十七ノ字」

「三十八ノ字」

「三十九ノ字」
「四十ノ字」

「四十一ノ字」
「四十二ノ字」

ぶつ切り、ドンガラ(粗)、白子を適宜に入れる同時に野菜を入れて煮る。

調味料として、味噌、砂糖(少量)、味の素(少量)を酒でとろとろになるまで溶かす。煮上がったら鍋に入れ、なお煮立ったらバラコ(筋子)、長ねぎを入れ、下ろす直前に粉山椒をふって出来上がり。アキアジ鍋はこの頃、作る人が試行錯誤して食べる人に「味はどうですか」と尋ねてその人独特の鍋料理を作っていた。

話者 吉岡タカ

注、この頃、「昭和二十七年八月二十九日」昭和二十七年八月二十九日(九月上旬)「十二月下旬」にはひと月七八百人から千名位の観光客が訪れていた。鍋料理は料理店などでは間に合わず、寺院の広間、好天時には外の広場で心得のある主婦が手前返して石狩鍋を提供した。
なお、これにたりず、弁天町や横町の漁家がわか食堂となって知人を頼って来る団体客に石狩鍋を提供したものである。(石狩鍋定着)

オ、昭和五十(一九七五)年以降の石狩鍋

料理研究家 南部あき子
石狩鍋(四人分)

素材 サケ、四〇〇グラム 白子、筋子少々。豆腐一丁、コンニャク一枚、大根一五〇グラム、シイタケ四枚、ゴボウ五〇グラム、長ねぎ3本、ホウレン草一〇〇グラム、白菜四枚、ササゲ五〇グラム、だし昆布三センチのもの三枚、昆布だし適宜、合わせ味噌(味噌一〇〇

グラム、みりん大さじ二杯、砂糖少々) 塩少々、粉サシヨウ

作り方

①サケをおつ切りにし、白子は適当な大きさに切り、筋子は皮から取り出し、バラコにする。②豆腐は角切り、コンニャクは一口大にちぎり、大根、シイタケは半月またはいちよう切り、ゴボウは笹がきにし、ネギは斜め切りにする。③白菜とホウレン草は茹でて、ホウレン草は芯にして白菜で巻き、3、4ヶ所を細く切った昆布で結び、2/3センチくらいに切る。
ササゲはすじをとって手で折って青茹でにする。

④鉄鍋または土鍋に昆布を敷き、中央に合せ味噌(味噌、みりん、塩を混ぜたもの)をおき、まわりにサケや白子、筋子、豆腐、コンニャク、野菜など並べて入れる。⑤昆布だし汁をそそいで煮ながら粉サシヨウをふりかけて出来上り。

注、サケは鮮度のよいものを用い、煮すぎないように注意し、鍋の煮汁が沸騰したらアクを丁寧にとり除く。合わせ味噌は好みにより辛口または甘口に作り、また、醤油味に作ることもある。

以上全体的に有名になった石狩鍋の由来を記したがまだまだ不明な部分が多い。発祥の由来を特定せずそのむかし石狩浜に訪れ、サケ鍋を堪能した人々によって作り出されたとするのもロマンがあつてよいのではないか。

北千島サケ・マス流し網漁めしき物語

北千島占守島崎崎港を基地として

吉岡玉吉

はじめに
北千島、北千島嶺(北千島)、占守島を基地として操業した独航船による鮭(鱈)流し網漁業は昭和十年代が最盛期であった。昭和八年(一九三三)から昭和十九年(一九四四)第二次対戦が終結し(現ロシア)に領有されるまで続き、石狩港からも、七漁業部、十数隻の独航船が出漁した。
当時、町に生活する漁家の若者達は幸って、北千島の鮭流し網漁に憧れ、心身を鍛えた。一五、六才となり、小学校高等科を卒業すると見習の通船期となると勇躍雇用の申し込みをしたものである。
多くの若者は独航船の漁労長、船長、機関長を夢みて海技免状(国家試験)取得(一八才以上)に奔走していた。手取り早くは、独航船乗組員の一人となり、見習見真似で漁労の方法や操船、操作法を身につけ海技免状を受けることになる。昔から、船乗りは、飯炊き(かしき)から始まるものであり、筆者も一五才で期間は短かったが、陸廻り(漁労のための陸仕事)の飯炊きとして出漁した。

注一 飯炊き(かしき)は舟師(船長)の目習い水夫で炊事係のこと。

「かしき」は舟師(北前船)の目習い水夫で炊事係のこと。
飯炊き、船内の食事係。出漁時は漁夫。岩手、福島地方の方言(名詞)
飯炊き
御飯のことを飯といふ。炊事係のこと。秋田、岩手、山形、新潟、群馬地方の方言(名詞)

一、北千島の概要とその島々

千島列島の東北端に位置し、温帯と亜寒帯の境界線から北の、阿頼波島、幌筵島、占守島、志林規島の四島と島列を北千島と呼ぶ。
占守島から僅か十二キロ離れてカムチャッカ半島の勸登加岬(ロバツカと呼んでいた)と相對する。北千島の緯度は幌筵島の南端が北緯五〇度。北端は阿頼波島の最北端で北緯五〇度五分である。経度は志林規島の東経五六度三分である。ちなみにわが石狩市は、北緯四三度一分一五秒、東経一四一度三〇分五五秒、一四一度二分三〇秒である。

注一 陸廻り
網の修理など船上で出来ない仕事を陸上とする。一隻につき一人から二人が配置される。高齢者の経験豊富な者が当たる。時には舟長、水夫上がりの人もいた。

1 阿頼波島
ロシア語名、
日本語名(呼稱)
アトランソア島
親子岬山、阿頼波富士。
阿頼波山、阿頼波

幌筵島の北西約二十キロのオホーツク海に聳える長さ十七キロ、幅十三キロ、周囲四十四キロのほぼ円形の島。島の北端は北緯五〇度七分で、かつては日本の最北端であった。島全体が一つの火山で阿頼波山(二、三三九メートル)、クリルアイヌはチャチャコタンと呼んでいた)という。富士山を海に浮かべたような美しい成層火山であり千島列島の最高峰である。



注

昭和十七年五月二十六日、独航船第五長栄丸に乗船、占守島に向う途上、幌筵島を右舷に見て左斜北方に紺碧の海にそびえ立つ白雲纏繞たる阿頼度富士を仰ぎ見たとき登峰富士を思い浮かべ、自然の偉大さとその秀麗を脳裏に納めた次第である。

注 日本地理体系第十巻北海道編六編(昭和五年)によれば、列島中最北の休火山島。北海道以北の最高峰(二三五八メートル)で四季雪を載ぎ、富士の如き壯麗を呈する。本邦最北端、北緯五十度五十六分は此の島の北端である。と記されている。

北海道の最高峰旭岳(二九〇メートル)より高く、晴れた日にはカムチャッカ半島の山々が見られる。阿頼度島の南岸は断崖絶壁が続き、北岸は少々平低でところどころに砂浜を形成する。好適な港湾となるところはほとんどなく、東茅渚、南浦で上陸できる程度である。大小十余の河川はいずれも各峰はなく、いずれも阿頼度山に源を發し西方に向つて放射状に流下する。

阿頼度山は二重式火山(内、外輪山の内部に中央火山口があるような構造の火山)で外輪山に東岳と西岳があり東岳が最高地点、外輪山は南側に大きく崩壊し、その内側に中央口がある。噴火活動は活発で一七七〇年(明治七年)、一七八九年(寛政元年)、一九三年(寛政五年)、一八一二年(文政六年)、一八四八年(嘉永元年)、一八九四年(明治十七年)に噴火している。

昭和八年(一九三三年)には一、渡瀨沖で海底噴火が発生し、寄生火山(火山の中腹や野に新たに噴火して生じた火山。富士山の宝永山や大宝山の類)である武蔵島が誕生した。

資料一参照

近年では一九八一年(昭和五六年)に頂上噴火があった。従つて火山灰層と基岩質(火山噴出物の層層が重なつて出来たもの)噴出物層と互層の間に流石流を挟む典型的な成層火山(噴出した溶岩や火山灰が次第に堆積して出来たもの)である。千倉連峰(千倉岳「チカラチキ」一八一六メートル)の分水嶺としての龍川(二十五キロ)あるいは熊川が長い水系を成している。この他の川は十キロ程の長さしかなく、西海岸に注ぐ河川として茂寄川、西川、加能別川、鴨川などがある。東海岸には鱒川、連毛川、日の出川などがあるがいずれも短い。

島の北西面は急傾面で断崖となり南西面は比較的緩傾斜となつていて、所々に平原となつており、昭和十年代(一九三五年)にはトラ釣漁場及び鮭鱒建網漁場があった。

地質的には堆積岩層ならびに深成岩からなる基底(基礎となる底面の地質)地質とこれを覆う多数の火山から構成される最も新しい時代の活動を行つた千倉岳と後継岳は典型的な円錐形を呈す成層火山(コニ

に噴火口の周囲に堆積して層をなしている円錐形の火山。富士山、八ヶ岳、羊蹄山)である。

山腹の周囲には多数の寄生火山が放射状に並んでいる。阿頼度島の生成は幌筵島の千倉岳、尻懸岳と向しく千島列島でも最も新しい時代と推測されている。

昭和一七、八年(一九四二、三年)頃では無人島で時化の時など島陸に独航船などが避難するほどであった。漁期(六、八月)にはトラ釣り基地四ヶ所、鮭鱒建網基地一ヶ所が操業していた。(北浦、波川崎、東茅渚、南浦、魚見崎)

2 幌筵島

ロシア語 パラムシル
日本語 バラムシロトウ

附図参照

ホロムシロと呼称していた。

クリルアイヌが、ボロムシリ「大きな島」と呼称していた。幌筵島は北東より南西に至る長さ、およそ一三〇キロ、最大幅およそ三六キロ、二〇四一平方キロメートルの長方形の北千島で最大の島である。

日本地理体系第十巻北海道編六編、改造社、昭和五年(一九三〇年)二月二〇日発行によれば、「長さ九一料、幅一六料、面積一四五五方料、主峰フアッス峰「シリアシリ」と称し、西南小半島にあり壯麗な円錐をなし、その北東のチカラ「ジャコムシチ」は活火山である。他に三子山、鉾山、円錐山、尖錐山等があり、いずれも一〇〇〇米前後である。湖水溪流も多くトルキ、シベツトボ川が著しい。太平洋岸は浅瀬をなし、反対側は絶壁が多い。占守島との間はハラムシル海峡をなし、村上湾、相原湾があつて占守島の片岡湾に相對する」とある。

千倉岳は昭和六年(一九八六年)大規模な噴火があつた。このほか硫黄山(二二二六メートル)、大硫黄島(二四九三メートル)、山煙山(二三四五メートル)などの活火山がある。

注一、堆積岩

岩石の採掘物または生物の遺骸などが泥木または風などによって他の場所には沈積堆積して生じた岩石。砂岩、頁岩(水成岩の一種。泥板岩の別命。灰色または黒色で、紙や硯に用いる。石灰岩の類。水成岩。沈積岩)。

注二、深成岩

火成岩の一種。地下の深い所で固まつて出来たもの。完全に結晶し、粒状の組織である。花崗岩。

3 占守島

ロシア語名 シュムシユ
日本語名 しゅむしゅう(占守島)

附図参照

クリルアイヌのシーモシリ「美しき島。よきしま」あるいは「親の島(先頭にある島という意味)から「しゅむしゅう」と呼ばれるようになり漢字をあてはめたもの。

幅一キロ余の幌筵島に面し、カムチャッカ半島の南端ロバトカ岬(通称ロバツカ)と僅か十二キロしか隔かれない。島は北東の長さ約十二キロ、南東約二十キロの弾丸の様な形をしている。高い山はなく緩傾斜の丘陵が起伏し湿地、湖沼が多い。最高一七六メートル(三好野)で占守島には火山はなく溶岩火山碎屑物も認められない。他の千島列島の島々とは誕生を異にしている。

おぢの茶畑の歌

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

- 三浦茶畑 (朝野) 故郷の茶畑
三浦茶畑 (朝野) 故郷の茶畑
三浦茶畑 (朝野) 故郷の茶畑

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

おぢの茶畑の歌

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

おぢの茶畑の歌

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

おぢの茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌... 茶畑の歌...

午前五時起床

朝仕事

網干場で網の乾燥

網きより(修理)

午前 七時
午前 八時

朝食

作業開始、

主として網きより

三〇分休憩(ほとんどなし)

昼食

作業開始

三〇分休憩

作業終了

夕食

午後 一時
午後 三時
午後 五時三〇分
午後 六時

注、①盛漁期になると魚がかかって網が切れたり、時化でやぶれたり流し網

は痛み、その網きよりと漁具の修繕で多忙になり休憩時間もなく、又、夕食後も手元が見えなくなるまで作業した。

②北千島の真夏は石狩より二時間早く夜があけ、二時間遅く日が暮れる。午前二時頃には手元が見える位明るくなる。又、夕方は陽が稲穂島の

影(硫黄山)に落ちるのが午後八時三〇分頃から同九時頃であり暗闇になるのは三時間位しかなかった。月夜などは日夜のようだった。だから頭が覚めたら太陽が昇っていてあわてて起きたら午前四時ごろであったと驚くことが間々あった。

業は一仕能中(漁の期間中)に七、八回あった。

注、「權廻し」

時代または潮の流れの早い海面や海峡等で網が六時、流れに翻弄されて二、三時間で数十反(一反は約四十五メートル)の網が根孔現象をおこし縄状になり漁獲不能となる。(潮の流れが速く海水が渦巻き状態となるため)この部分を取り外して、船内でもできるが大部分は陸で処理する。

陸廻りでは「繰り戻し機」を一反当てに入れて、数人が手動で機を廻して振れ戻しをする。一反の網を戻すのに数時間もかかることもあった。

その他、漁網は昭和二十年(一九四五年)頃までは主としてラミーを使用していた。この機織は水中に長く使用するとべたつき羅網率(鳥をとらえる網、転じて魚のかかる率)が悪くなるため、当該漁網を陸に上げてカッチで染めて再使用する。この作業も陸廻りの一つであり、この他船上で出来ない漁船用機材の修理など様々な仕事が出回っていた。

この人々(七名)の炊事当番(飯炊き)が筆者(二十五才)の役割で炊事仕事が終わった後は網干場に出て仕事するのが日常であった。

注、ラミー 通常ラミーと発音していた

芋麻 からむし、いらくさの多年草、山野に自生、南京草ともいう。

一、五メートルくらいになる。茎の皮、機織で繰後機や漁網として使用。日本では昔から機織して機織とした。

注、カッチ

フィリピン産の木の煮汁で造った染料。

(一) 当該、陸廻りの仕事は、同漁業部所属独行船三隻の漁具の整理、特に流し網の網きより(修理補修)を主とするものであるが中でも網の振れを戻す「權廻し」は大変な労働であった。この作

四、飯炊き作業のあれこれ。

1 南瓜一個がべニ鮭二本分、(一円七〇銭)

昭和一七年(一九四二年)魚一尾の工場渡し代価(北千島水産調べ)

べニ八五銭、ギン三五銭、シロ三〇銭、マス二〇銭。

タンパク源は鮭、鱒を始め魚類豊富であるが、ビタミン類が皆無で片岡湾で南瓜一個、紅鮭二本分(一円七〇銭の値段ということであった。それでも「買って食べてみるべや」となって紅鮭、二本分と物交(物々交換)して味噌汁の具にして食べたが、シオンベンカボチャ(海岸方言で小便南瓜)で水つぽかったが、それでも南瓜の味がして食事が潤った。

野菜については、乾大根、干菜、ワカメ、五升菘(馬鈴薯)等を持って行っているが、ビタミン系が不足がちなので、平坦部に雪があるうちに丘陵の道松の間を耕作して、寒さに強いミズナ、ハクサイ、タイナ、夏大根等を植えた。

芽が出たと思ったら、一〇日位でミズナ、タイナは食べられるまでのび、見ると一日に二、三センチ程ものびている有様、何故このように早いのかと思案した結果、霧の深い日もあるが、日照時間が石狩周辺より二時間前後も長い。朝夕四時間も日照りがあれば植物の生長が早いのは当然であると理解した。

2 朝はまた五時から起こされて

「北千島漁労歌」ではないが、「夜はまた二時まで夜なべして、朝はまた三時から起こされて、やれよ、やれよとせめられるぞエエ」

これほどにはならないが、毎朝五時、一般の人より三〇分早く起床、飯を炊く。ほとんど汁一菜の他に夕食は鮭鱒の焼魚、又、鮭を具にしたカレーライス、三平汁などが定番であった。

注、漁期中は味噌、しょう油漬は御法度。不漁するから、チンチン(チンチン)焼きもしてはならなかった。

味噌汁は切干大根、干菜(大根葉)が主で、玉ねぎ、モヤシ類は高級品である。六月中旬すぎに蒔いたミズナ、タイナ等は味噌の具ではなく浸し物(おひたし)として献立した。

なにしろ全く始めての作業であり、作る側に廻ったことのないため、出発時、母から米の研ぎ方、味噌汁の作り方、など一般的な調理法を聞いては来た。

しかし慣れないまま、に御飯を炊き、皆に「毎回ちがった飯が出来てい、な。どうなっているんだ」などと皮肉を言われる始末。明けくれ苦勞の連続であった。それでも切り上げ日近くなつてどうにか「旨いマンマ(御飯)が炊けるようになったナ」と誉められるようになった。

(一) 御飯の炊き方

炊き方のコツは薪、石炭、鍋釜で炊き、その火加減が重要である。むかしからのことわざに、「初めチヨロチヨロ中パツパツ御粘が出たら火を引いて、赤子泣いてもふたとるな」が要領であった。

新米、古米では水の量で加減するが、大体手のくるおしの上位どころを目やすとした。飯の炊き方は水から炊かない(海軍方式)一旦水を沸騰させてから、あらかじめザルに研いでおいた米を入れ、水加減を

霧も人々の悩みの種となっているが、北千島周辺の五、六月の濃霧は最盛期で、海上も陸上も、「一寸先は闇」ということわざがあるが、「メートル先は闇」と表現したくなる程、ガスル。(化する。)

霧は掛かる、と表現するのが普通であるが北千島では霧は降る、と表現がピッタリで、二、三〇分もすると着ている衣類は濡れて身体が冷たくなる。ですから陸の仕事でも合羽を着て作業する。風も無く一日一杯続く、干場の網も濡れっぱなし、六月では三分の二は濃霧が降る。海峡(靛藍海峡)を行き来する軍艦、輸送船、独航船の霧笛、警笛が遠く近くに聞こえる。しかし、多くの船が通る海峡内では濃霧のため衝突した、という話は聞かなかった。

七月に入ってから濃霧の降る日は少なくなった。海で仕事する人は傘を持って霧を通して見える眼鏡でも發明されないものかと語り合っていた。

注 濃霧(がす) 発生メカニズム。

対馬暖流(黒潮)

フランクトンや栄養塩類豊富な日本近海の代表的な寒流でオホーツク海、ペリリング海の低温分水が千島列島沿いに南下して金華山沖合周辺でぶつかり合う、このため霧が発生する。特に温度の低いところ程、濃霧となる。北海道東部地方、南千島、中部千島、北千島と北上するごとに濃くなって行く。(水産百科事典)

り廻り獣道ならぬ通路が無数に走っている。身体は本道のドブネズミよりひと廻り大きく、尾はこの種より短く、敏速に行動出来ず、よろよろ走り廻っていた。人家に入ることなく、ハイマツの間を見ると間々に姿を見ることが出来る。それほど多く生息している。これは外敵が少ないためだろう。その他の動物は見られなかった。

鳥類は、鴨、鵜はわずかに飛来しているのを見るが、厚田浜や石狩浜の漁船(鯉漁)のように多量に飛来するようなものではない。一羽二羽程度の飛来である。

経緯ではないが、蔭の洞方面の岩場に六、七月頃巢作りしたゴメ(鵜)の卵を取ってタンパク源にした。という漁船員の話があったが定かではない。期間中渡り鳥などの姿、また鴨、鵜の姿は晴天のとき、時折り見る程度であった。

鴨はハシブトか、ハシボソかはっきりしないが、本道にいる鴨より一回り大きく鳴き声もテノールで、動作は緩慢、海岸線に餌(魚類)が打ち上げられていても見向きせず、著早い動きは見られず、追うと逃げる程度であった。数は少なく何日も見ることはなかった。又、すずめの姿は仕納中見られず、動物や鳥類の鳴き声も聞かれなかった。

六 依船福運丸の遭難事件

六月下旬、漁期最中依船福運丸は操業のためカムチャッカ半島ロバツカ岬(ロバトカ)沖に出漁、掃蕩予定時の翌朝一〇時前後になっても帰ってこない。翌日になっても帰港せず、依船(第一長栄丸、第五長栄丸)はもとより所属漁業会社出漁船も出漁傍ら捜索が始まった。

○占守島長崎周辺の植物。

北千島の島々は、巫塞帯(高山植物)植物が多く、ミヤマハンノキ、ハイマツが主要樹種である。

占守島長崎周辺の樹種としては、「日本地理大系第十巻北海道樺太編昭和五年」では樺松、赤楊、蘆荻、等が生じ云々としているが、この頃昭和十七年(一九四二年)ではハイマツ(道松)を主体にミヤマナカマド、キンロウバイ、キバナシヤクナゲ、ガンコウラン、コケモモなどの灌木類が混生している。樹木の六〇パーセントはハイマツであった。

乗組員で興味を持つ人は、時化などで出漁出来ない日に上陸して、箱材で鉢を作り、附近に自生するガンコウラン、キンロウガイ、コケモモ、キバナシヤクナゲ等を採取して持ち帰っていた。

注 樺松・道松

マツ科の匍匐性常緑灌木。葉は針状五本ずつ着生する五葉松の一つ。北海道北部、千島に自生、本州では中北部の高山に自生。

赤楊・シヤクナゲ(石南花)

ツツジ科の常緑灌木。高山に自生。しばしばハイマツと混生。高さ一〜二メートルになるが、この地では匍匐する。

蘆荻・苔

古木、湿地、岩石の表面などの生える。花の咲かない低い植物を総称する。藪苔植物と呼称する。

○占守島長崎周辺の動物たち。

熊やキツネ等は幌延島、阿頼波島に生息するが占守島には生息しない。主要動物は小動物である野ネズミでハイマツの中を堀に縦横に走り廻り、西寄りの風で困難を極めて三日目を迎えたが、何の手がかりなく経過した。福運丸の出漁場所は、この頃(六月下旬)鯉鱒が一番回避するロバトカ沖の太平洋側に出漁したと推定し、各船もこの方向を優先して捜索したが、手がかりはなかった。戦時下であり海軍に捜索方を依頼することも出来なかった。それでも片岡湾に基地を持つ水産会社、柏原湾に基地を持つ水産会社所属の独航船二百余隻が捜索に当たった結果、行方不明になってから七日目に、発見され、曳航されて全員無事帰港した。

依船乗組員、陸廻り一同、万歳三唱することく祝賀した。

後日、番屋(陸廻り宿舎)で漁労長兼船長である金田平治氏(明治四十四年生まれ、当時三十一歳、郷土研究会会員金田隆一氏実父)からその漂流記を聴取した。漂流中の沈着対処法、指導力、信頼性等に驚嘆した次第である。

注 六月下旬の操業時間は午後三時頃出漁、翌朝十時前後帰港。操業場所は、

太平洋側は、島列島沖、占守島沖合数マイルからカムチャッカ半島ロバトカ岬沖合周辺、オホーツク海側は阿頼波島周辺から志林規則沖合周辺が主な漁場で、基地より一時間前後の航海時間で操業したものである。

六月上旬から七月中旬までは大時化で出漁出来ないという日は稀であるが、濃霧が深く航海は難航したものである。当時の独航船には、海図、羅針盤、バロメータ(晴雨計)の設備はあるが、無線、方向探知機、魚群探知機の配備は全く航海し漁労をおこなっていた。

○金田漁労長談

漂流の原因は、機関のバックボーンであるクランクシャフトの欠損。ロバツカ沖三〇マイル(約五〇キロ)海域で一週間位前から紅鮭が多

船(しお)は……

船首から海中に投じて曳索により保持し船首を風向きに保ち船体が流れるのを防ぎ、海砂流とともに漂着し釣漁具での操業を容易にするために用いる操業用の海錨の一種。
(水産百科事典、昭和四十七年一月五日発行より)

七、僚船福運丸の曳航苦戦(切揚げ時)

太平洋戦争(大東亞戦争と呼称していた。)たけなわの昭和十七年(一九四二年)であり、北千島周辺にもアメリカの艦船(特に潜水艦)が出没したころであり、アリユージャンから北千島海域の戦艦かんばしからず。漁獲も七月中頃から下方線をたどり、七月二十日予定より早く切り揚げが決定した。
エンジン故障の福運丸のクランチャフトは北千島に鉄工所はなく予備もなく、艦船になった同型焼き五エンジン(クランク)を小型漁船から借用し、取り付けたころ、時速二、三ノットで航海可能となつた。

二、三日近海(鳥羽列岩周辺)に出漁に出たが、充分な漁獲は出来なかつた。航海出来るといつても二、三ノットの速度では長距離単独航海は無理。特にオホーツク海にもアメリカ潜水艦の出没ありとの情報もあつて、所属僚船による稚内港まで曳航することに決まつた。
先航船は速力の若干速い第五長栄丸、中間船は第一長栄丸、後航船を福運丸として出航。速度を計算したところ六週程度で航海可能との結果となり、七月二〇日午後三時頃、長崎を出航、帆柱島警備隊から平田崎を交わして、阿頼波富士を右舷に見ながら進んだが、六週(二

週)に回転しており、あの大時化を思えば二日や三日かかっても安心だ、と思ひながら休息していた。

一日も暮れようとする夕方、西南方向の空が、夕陽が沈みくれないになりかけたころ、船首に立つてその方向を見ると雲でないと思われ物が見え水平線に見えるのでラット(舵)を取っているがースン(水夫長、横町小端六太郎氏、大正四年生、当時二八才)に「あれでないか」と指さしとく、凝視して「そんだナ、皆んな呼んでこい」と言つたとで船員室に行き、誘つて船首にで、「おそくてもあさつては稚内に着けるべ」と本道に近づいていることを喜び合つた。

翌日、晴天で中知床の山並がはつきり見えたが中々近くにないが、「もう大丈夫」とこの日も夕方になつた頃、北海道側から、船影が見えて来ていた。近づくと、先航していた石狩港籍、吉田漁業部所属「第一昭至丸」。後陣漁業部所属「第一白龍丸」が安否を気遣つて迎えに来てくれた僚船は一日のばして待機「あの時化の中で故障の福運丸を引つ張っているからな。」と言つて安否を気遣つて「行つてみるか。」と出て来たという。何と有り難いことか。翌日午後稚内港に無事入港した。

稚内では福運丸のエンジン(燒玉無水式重油エンジン、八十馬力、木下鉄工所作成)、クランクシャフトが交換出来る状況にあり、漁業長、機関長他数名の作業員を残して、乗組員を各船(第一、第五長栄丸)に分乗して一日半の航海で無事石狩港についた。

一キロ)位の速力のため船足は思う様ではなかつた。
福運丸もエンジンをかけ三週程度の速力は出しているため先航船二隻も速力は通常速度で曳航し懸案であつた走行トラブルもなく航海することが出来た。北千島志林規島から西南、樺太中知床岬に進路を取りオホーツク海を横断するコースを取ることもなつた。

途中アメリカ軍の潜水艦等の攻撃をも警戒しつつ航海した。航海二日目の夕方、オホーツク海中間地点にきたころ北西風、二十五メートル前後の暴風雨に遭遇、午後八時ころ第一長栄丸と福運丸間の曳航索が切れ航行不能となつた。

この頃、同航路を四五〇屯級の輸送船が後続して来て、見守るようが見えたが、二、三十分で離れ先航して行つた。多分時化を切り抜けるのと判断したのでらう。この時こそ大型船を羨ましく思つたことはない。福運丸はエンジンがかかつているが激浪に翻弄されて沈没するのではないかと懸念されたが、同船船長(金田平治氏)始め乗組員の周到な対応、特にシーアーカーの対処法など懸命な操作で乗り切ることが出来た。

第一長栄丸、第五長栄丸は福運丸の風上に位置して長折り(長溝、波頭に白波を立て襲ってくる波)を警戒し波浪と戦つた。午前三時頃、風はやや弱くなり、危険な状態は去つた。それでもうねりも山の高く、僚船がうねりの間に入ると二分位見えなくなる程の大うねりであつた。(うねり間隔一〇〇―一五〇メートル位であつた。)夏海とはいひ、嵐に慣れている経験深い乗組員も「こんな時化は操業中でも合つたことナ」とは言っていた。

風波は次第におさまり午前七時ころになり、うねりも小さくなつたので曳航索を修理して航行を開始した。翌日なお、山(樺太)も見えない航海が続いた。オホーツク海の実ん中ではあるが、エンジンは順

八、風雲告げる占守島の周辺

1 千島探検開拓の足跡を忍び感涙

思い出に残ることは、めしたき作業の傍ら休日を利用して海軍基地である片岡湾を探訪した。約四キロの道程を歩んだが、忘れられないことは片岡湾丘上から見た湾内の光景である。

片岡湾は自然の要港と目されるところで海軍第五戦隊の集積基地でありユージャン列島まで守備範囲とし、常に十数隻の軍艦(巡洋艦、駆逐艦、海防艦、潜水艦)や輸送艦が寄港しており、その勇姿をみて北方海域は第一線にあるんだなと実感した。

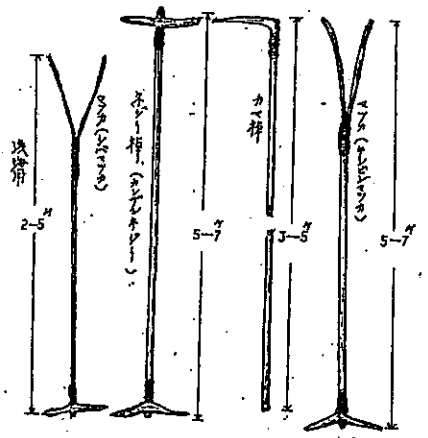
いま一つは、片岡湾の陸に明治二十六年(一八九三年)予備海軍大尉、重司成忠が率いる報効義義会が探検開拓に入つた有志二十余名の顕彰碑が建立されており、これを拝し、往時の開拓の苦勞を偲び、手を合わせ感涙した。資料五参照

注、①片岡湾などの由来

明治二十四年(一八九一年)明治天皇(宮内省)の勅諭を得た、占守島踏査者、片岡利和侍従(天皇のおそばに仕える役目の役人)を長とする調査隊が占守島、当時の湾名モヨップ湾に上陸したことから片岡湾と名付けられ、島の長崎、小泊、沼尻、中川、及川、竹田浜など、その隊員名を聞く。

②根室市出身の作家寺島征史氏は作品「宝庫千島」の中に「昭和十二年(一九三七年)樺太、占守、阿頼波を旅して、片岡湾頭、郡司ヶ丘の報効義会志士の墓標の前に額を突いた私は、双眼に涙をうかべて暫く低徊するに忍びなかつた。」云々と記している。

図6 昆布採取用具 (昭和10年代)



杖に束ねて一把握し、目方五貫目(一八七五キロ)を一丸として業
 会に納めたという。(明治期の出荷)
 昭和十年代までは見入りも良し黒褐色で肉厚で長いもので三メー
 ルから四メートルのものもあり、別狩の前浜を中心に凡そ十四カ所の
 岩場に自生し特に濃昼山道のチャラツナイ、ルーラン、太島内(ふと
 しまない)産は一等級になるものが多かった。
 注、一等級(いっとうけん)
 等級によって値段も上下する。(一等級一三等級、等外、昆布
 の場合は羽先部が等外)品質の良し悪しは漁協から派遣された
 検査員による。ボンボン(検査証「押印」)が打たれる。
 時に一等級になるものに等外品になるものを入れ、見破られ梱
 包を解かれ再検査される御仁もいた。これを「アッコ」を入れ
 るという。

罾は常に深海(三〇〇メートル位)に頭を海底に突込み冬眠状態で
 暮らし十一月中旬ごろから産卵のため蒸場に移す。ゴッコ(布袋
 魚 ほていうお)と同じ性質を持つ変わった魚である。寿命は三才以
 上は少ないという。
 特徴は鱗は風を目ざして接岸するが、罾は時化を目ざして初冬の雷
 が鳴る頃に接岸する。
 こんなところから雷魚(かみなりうお 鱈)と書いてハタハタとも
 読まれている。
 荒れ気象状況から昭和に入ってから六、七件、犠牲者十名近く
 を出している。

罾者も昭和十八年十一月中頃、別狩(岡田前浜)の建場で夜間、急
 激な時化に合い建網を揚げ基地に漂る途中「罾」(ま 船揚げ場)の二、
 三十メートル手前で二枚から三枚の高波を受けて転覆、乗組員七人、
 水船(みずぶね)になった保津船(ぼつせん)と共に「罾」に入り
 全員水浸しになったが無事だった。
 海では一寸した油断が大害になることがある。漁期は短い上、時化
 早いとくるから一仕納のうち出漁出来る日は、四・五日で一時の勝負
 だった。漁獲は大漁と云っても罾のように大量に寄せるものではなく
 一起(ひとおこし)し、石油箱で七八箱も獲れば良い方で一年の
 生計を維持する漁ではなかった。
 昭和十年代では陸上輸送も充分でなく、また冷蔵設備もなく、給
 て販売は石狩、小樽に精々十トン前後の「発動機船」で沖買いして夫々
 の港(石狩港では江別まで)に至り販売したものである。建元(たて
 もと)では親方の贈与(取前 とりまえ)の他、従事者全員で売上高
 を案分し、時には現物配分した。
 大方は村内で処理出来る漁獲量であったのでその後は蓬の茎や萩の
 茎に通して「目ざし」に「一夜干し」にし、多い時は販売し、少ない
 年は自賄いの他、ハタハタの飯館(いすし)用とした。

昆布漁は磯舟に一人乃至二人で主に「マツカ」「ネジリ」で昆布を
 挟んで抜き取る。銀杏草や天草は浅瀬に自生し安易に採取出来ること
 から「磯廻り」を専門とする高齢者が鋤鎌を使って「箱メガネ」で覗
 きながら採取した。
 注、磯廻り(いそまわり)

沿岸域で磯物(いそもの) 海藻「昆布、銀杏草、天草」魚類「カ
 シカ、アブラコなど」磯魚を取る漁をする。またはその人
 主として漁期期一人用の磯舟で高齢者が磯延縄や刺し網などで
 小漁獲きの漁をしていた。別狩は七人程所在。
 昆布採りは天候に左右される仕事で一日で干し上がる晴天でなけれ
 ば操業せず、一仕納(ひとしな) 十日前後が漁期であった。
 昔から食物の「出し」として「コンブ」「カツオ」は二大味覚とさ
 れ、その需要度は変化なく、これからも一層必要とされる海産物であ
 り、北海道はその拠点。
 温暖化などによって減少している海域もあるが各地で養殖も行なわ
 れ生産高も需要に答えるほどに伸びている。

しかし昨今では「厚田昆布」の名称はほとんどなく、七・八月一部
 の漁業者によって採取されている程度である。
 浜で見ると長さも二メートルを超えるものもなく、短く甘(うま
 味)はそれほど変化はないが、生産量は少なくなっている。
 自生量は潮流、磯焼け(温暖化) 雑海藻の繁茂による荒廃に起因し
 減少の一途にあることは嘆かわしい。
 6、罾漁(はたはたりよう)
 期間、十一月中旬―十二月中旬。
 漁法、建網(定置網) 刺し網。
 別狩では昭和十年代で建網二カ統、刺し網八軒によって操業され
 いた。

食へては、身体の特徴から「馬の鼻息でも煮る」と云われる如くアツ
 と云う間に「焼ける」煮る。脂も少なく淡白なところから「塩して」一
 夜干しして食べるのがベストで、子供らは食事後でも骨を抜きお八
 つ代わりに入れていた。田楽でも良し、飯館は別として塩蔵して保存
 食、すし練の三平汁を愛ぐ甘(うま) さがあった。
 ハタハタは雌は身体が大きく腹が入っていて甘そうに見えるが、
 腹子は煮ても焼いても歯がたたない。雄は小型で粒が揃っていて一夜
 干しにしたのがシンプルで一番甘い。
 初冬の魚として秋田音頭ではないが、八森(はちもり) ハタハタ、
 男鹿では男鹿ブリコ、と有名だが、北海道の厚田でも春の「厚田ニシ
 ン」初冬の「厚田のハタハタ」と銘柄となっていた。

おわりに
 頃は戦争たけなわで、働き手は召集や徴用で巷から離れている時代
 であった。それでも浜の人びとは緊張しているが平和に暮らしていた。
 ともあれ一年の締め括りはハタハタ漁であった。漁中場になると見
 透しをつけ、若衆は正月の小遣稼ぎに石狩のアキアジ場や噴火湾のカ
 レイ網場に出稼ぎに行く。
 別狩の若衆ばかりでなく村中の若者は働き者。年がら年中身体を動
 かしているが財を成し得るか云えばそうではない。「有る時の米の
 飯」ではないが「今夜使つても、また漁があれば金は入る」と大盤振
 舞い残らず使ってしまう。こんなのが漁師の気質で年がら年中ビー
 ビーカラカラ。金は残らないのが漁師気質だった。そんなこんなで一
 年を暮すのが別狩浜の人々の生活であった。
 書き終えて文中杜撰のみ、浅学の上拙い体験を慮せず記述した次第
 であり内容に相違するところあれば御叱責の上御教授戴ければ幸甚と
 するところです。(完)
 二〇一三、六、十七日
 追記

厚田川によって厚田村との境をなしている。

沿革 安政の頃に平田與惣右衛門(よそ うえもん)の漁場請負の番屋が一棟あっただけで、明治に入ってから徐々に移住者が入り、六年には十八戸、四〇人でみな漁業者であった。明治六(一八七三)年頃は、鯨建網と刺網の数は合わせて三三六統、明合船一〇艘、三半船二艘、保津船一艘、磯舟九艘であった。

漁業 水産物は鯨、鮭、昆布等で、漁期は鯨が四月上旬より六月下旬まで、なまこが六月十五日より八月十五日まで、鱒は六月上旬より七月下旬まで、鮭は九月上旬より十一月中旬まで、昆布は七月十五日より八月三日までである。本年の漁況は厚田村と同じく薄漁であった。明治十六(一八八三)年伊藤文平、新潟県北蒲原郡から厚田村別荘へ。明治二十(一八八八)年吉岡玉 同郡より石狩郡石狩町に移住して漁業を営む。

漁具類 鯨建網、刺網の数は合わせて三三三統。漁戸の財本(さいほん) 一昨二十一年の漁戸の財本は一〇〇〇円以上の者一戸、五〇〇円以上の者三戸、一〇〇円以上の者十二戸、一〇〇未満の者六戸である。

出獲高、鯨一九七三石八斗五合、鮭二一石八斗三合、昆布四七石、なまこ二六〇斤。

生活、世帯数は六九戸、三三四名(男一七六名、女一四八名) 鈴木トミエ「新聞に見る石狩・厚田・浜益歴史年表」注、(一)内他一部筆者追記

資料三 ☆その昔の別荘

厚田郡厚田村大字別荘(現石狩市厚田区別荘) 明治初年(同二年八月一同六年)から明治三五(一九〇二)年までの厚田郡の村。厚田川の南側に位置し、北は厚田村、西は海。近世はベツトカリなどと記録される地域。

注、ベツトカリ、アイヌ語名。ベツトカリ、川の手前(松浦「西蝦夷日誌」) (松浦は南にあった押琴の運上屋の方からみて呼んだ地名であると書いた。(北海道生活環境部編二〇〇一・一六頁))

「石狩国地誌提要」によると戸口は一八戸、四〇人(永住一三戸、男二、女一四。寄留二時的に本居を離れてよそに住むこと。大体九〇日位という)五戸、男五、畑四段余、明合船(ずあいぶね)一〇三半船、一ホツチ船一、磯船九。(地誌提要、北海道立文書館所蔵・簿書七〇六六)

注、明治一六(一八八三)年漁業のため父丈吉五男、明治三五年生まれの一族、伊藤文平が新潟県北蒲原郡南浜村大字島見浜(現新潟県北區島見町)から入植。(筆者調べ)

明治一八(一八八五)年には山口県八戸が厚田川沿地に移住した。(状況報告。同二〇(一八八七)年の現住人員一八六人(平凡社編二〇〇三))

注、筆者祖父吉岡玉内、明治二(一八八八)年漁業のため新潟県北蒲原郡南浜村大字島見浜から石狩郡石狩町大字弁天町(現石狩市弁天町)に移住。(筆者調べ)

明治三三(一九〇〇)年の戸口は一〇五戸、男二四七、女四六二。鯨就業建網六統、刺網三四三枚、漁獲二千三〇〇石(平凡社編二〇〇三)

明治十五(一八八二)年に厚田郡各村の戸長役場を古澤村から移転し同二(一八八八)年には登記所を設置。また石狩警察署別荘分署を設置し同年には厚田村に移転した。(町村誌資料、道立文書館、同三五(一九〇五)年厚田村の一部となる。(平凡社編二〇〇三)) 注、父丈吉明治三五年、厚田郡厚田村大字別荘で伊藤文平の五男として生まれ、厚田村尋常高等小学校高等科を卒業。漁業に従事し適齢期になり二年間の兵役を終え、大正一三(一九二七)年

備考の放(はなし) 数は刺し網の保有数、時期により変動あり。

凡例

A	鯨刺網漁業者
B	鯨刺網漁従事者
C	鮭流網漁業者
D	昆布採取業者
E	昆布採取従事者
F	鱒漁業者
G	鱒漁従事者
H	磯廻り漁業
I	従業者
J	海鼠曳

業種内訳

鯨建網業者	一カ統	
鯨刺し網業者	一九軒	三五五放
鮭流し網業者	一一軒	
鱒建網業者	二軒	
鱒刺し網業者	一二軒	
昆布採取業者	二六軒	
磯廻り業者	九軒	海藻採取の他、雑魚漁
海鼠曳業者	三軒	

タカと結婚。即日、吉岡玉内と養子縁組して家督を継ぐ。母タカ(明治三八年生)は厚田村大字小谷村(通称山下)で米田幸太郎の長女として生まれ、同村小学校を修了(この頃の女の子は高等科卒業するものはなく、また六年卒業は希で大半は四年生終了であった)終了後は網元へ丸(ヤママル 通称ワタヤ)佐藤松太郎本宅に女中奉公に仕がり、四五年して東京の別宅に家族と共に転出。大正二(一九一三)年関東大震災の折大分県別府温泉に行っており難を免れた。その後、厚田に帰り結婚。東京の別宅には講談巡査五人配置されていたという。母の生家は「山下」と呼ばれており、中位の建網業者で丘陵に番屋を立て崖下に雑倉を配置して鯨建網漁をしていた。奥座敷には大きな仏壇があった。明治の末に山下の漁場が不漁続きのため切り上げ、別荘の空き家になった鯨番屋(昭和二〇年頃でもランゾであった)に移転した。山下ではこの番屋一軒よりなく、青島には鯨の建網場が三三カ統と刺し網業者が一〇軒位あった。また物心付いたころには本村にも番屋(小谷村)にもアイヌの人達はいなかったという。なお、「山下」は村人が呼んでいたあだ名のようなもので、母の実家の姓は「米田」である。筆者は小学校高学年まで山下が姓だと思っていた。

*各項の注は筆者解説

資料四 厚田村別荘漁業者及び従事者等調(昭和十年前半期)

当該地区は住民の九割が漁業に携わり、昭和初期からは鯨建網一カ統を中心に、刺し網漁業者一九軒、放数三五五放(一放五把)を保有し、生計を維持する集落であった。その後、年を追って鯨の接岸が減少し好不漁が断続的となり昭和十(一九三五)年頃からは、昆布、鱒、鱒漁とも並行し操業するようになった。昭和十(年代前半)の漁業者、従事者等次のとおりである。家族数は定数及び非定数(昭和十五年)

厚田村別狩漁業者及び従事者等調 (昭和十年代前半期)

番号	氏名	家族数	職業	備考	番号	氏名	家族数	職業	備考
①	岡田	4	ADH	10放	③1	本田	2	BE	
②	樽田	4	ADI	10放	③2	田中	2	BE	
③	米田幸太郎	2	ADH	10放	③3	池田	3	BEGH	
④	相澤芳太郎	3	ACD	20放・鱒	③4	成田連太郎	4	BE	兼職
⑤	伊藤市丈	8	ACDF	大福丸鱒建網・40放	③5	村瀬	3	BEI	
⑥	佐藤	3	ACDF	30放	③6	桶谷	2	BE	兼職
⑦	伊藤春吉	4	ADGH	20放	③7	瀬戸	3	BE	兼職
⑧	斉藤慶太郎	4	DAH	昆布加工・10放	③8	前田	3	BE	兼職
⑨	五十嵐一英	2	BH		③9	釜沢正一	3	BE	兼職
⑩	高井徳松	3	BGI		④0	山中鉄三郎	2	BE	兼職
⑪	山田貞夫	2	BG		④1	安田	2	BE	兼職
⑫	有田久蔵	6	ADCF	30放	④2	久野	2	BE	兼職
⑬	笹山ミヨ	1	BEG		④3	小谷清一	2	BE	兼職
⑭	深野仁三郎	5	ADFJ	20放	④4	佐川	2	BE	兼職
⑮	坂上作太郎	4	ADIHF	20放	④5	尾崎利之助	6	BDGH	
⑯	能戸初太郎	5	ADFH	10放	④6	見楚谷鶴吉	5	ADCFJ	20放
⑰	坂上米吉	2	BDG		④7	伊藤文三郎	4	ADIG	10放
⑱	佐藤市太郎	2	BDI		④8	山口仁太郎	4	ADCF	20
⑲	佐々木清蔵	2	BDG		④9	加藤一郎	2	BD	
⑳	匹田ツネ	1	EB		⑤0	菅野仁作	5	ADCF	20放
㉑	木村	2	BE	兼職	⑤1	伊藤与三郎	4	BDIG	機関士
㉒	谷藤	2	BE	兼職	⑤2	有田	2	BE	
㉓	田中商店	3	小間物雜貨		⑤3	三村	3	BE	竹細工業
㉔	谷本	4	郵便局員		⑤4	伊藤寛松	8	ADCF	鱒建網・20放
㉕	川原田	4	家畜商	同級生勇作	⑤5	深野仁三郎	5	ADCFJ	15放
㉖	桶谷	2	AE	兼職	⑤6	古山 武	3	AD	鱒建網
㉗	西尾幸作	5	BE	機関士	⑤7	佐藤	2	CE	
㉘	住谷 治	5	士建業	村会議員	⑤8	一戸ヨシ	1	BEIG	
㉙	古山	3	BE	後、江別で長船	⑤9	又イ 古山		番屋	別狩番屋
④0	田中	6	ADFC	20放	⑥0	又イ 古山			口一カ

58世帯、192名

石狩市大水害概略史と札幌市等の降雨量

田中實 編

一、石狩市大水害概略年表

西暦 和暦

一八七一 明治四

一八七九 明治二二

一八八一 明治二四

一八八九 明治二二

一八九〇 明治三三

一八九二 明治二五

一八九三 明治二六

一八九四 明治二七

一八九六 明治二九

出来事

春、石狩川洪水、家屋流失、川岸の崩壊起こり本町側に家屋移転。

四月から五月下旬にかけて、石狩川洪水。当地方の被害甚大。

四月から五月にかけて石狩地方大雨。大きな被害あり。

四月、石狩川洪水。

三月三日、暴風により船場町の共同倉庫、親船町の官舎の屋根が吹き飛ばされ、その他の家屋若干にも被害あり、川崎船一隻沈没。

(函館新聞四月二十九日)

三月二日夜から一四日にかけて近來にない暴風雨となり、石狩河口に停泊中の川崎船二艘難破し、保津船二艘沈没(道毎日新聞三月一八日)

三月二日大暴風雪。五日まで渡船止まり、郵便物運ばれず。

三月、石狩川洪水。茨戸から花畔村五娘の間決壊し、往来危険となったので居住者六戸が移転。土地流失のおそれにより、花畔村総代から工事着手方を願ひ出た。(町誌下巻)

四月八日から九日にかけて石狩川茨戸川増水し家屋浸水などの被害が出る。花畔村五番地

一八九九 明治三三

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一九〇四 明治三七

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

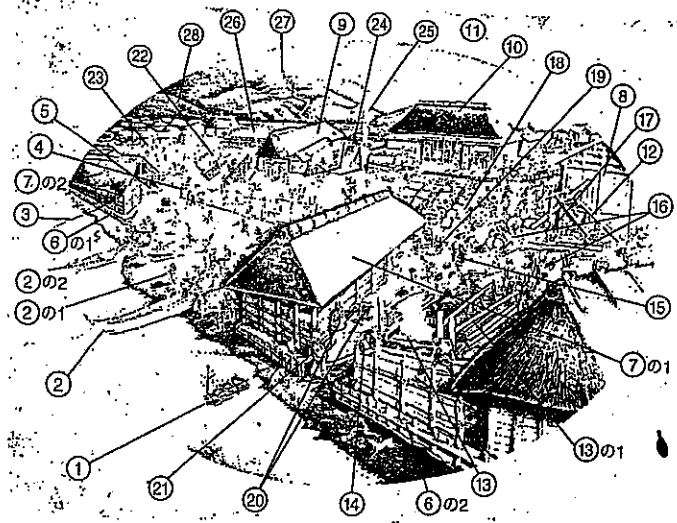
一八九八 明治三一

一八九八 明治三一

一八九八 明治三一



景の漁場は、権太アイヌ創業の三建場の一つ、通称「中番屋」の前浜地域と推断する。(もともと筆者の知る昭和二十年代には、この付近を中番屋と呼んでいたものの、既に建場などはなかった。)

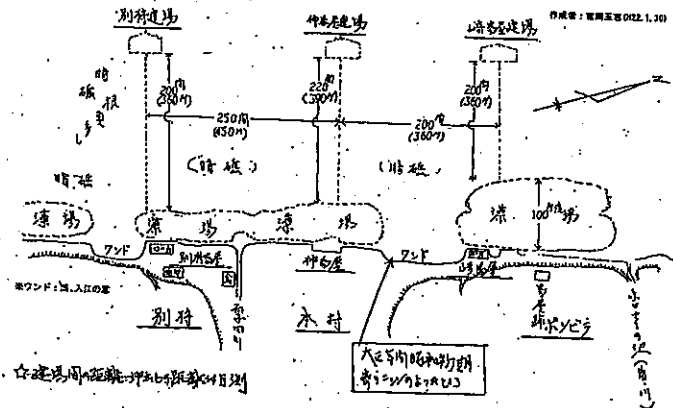


石狩国厚田郡厚田村旧権太アイヌ鯨乾場之図

ウ・事項解説

- ① 矢来(やらい)。船を停泊させる洞(ま)の施設。丸太を組み立て配置して岩石や五郎太石(ごろた石)を詰める。先端に立ててあるのは、カラマツの若木で、岩石の間に固定し、洞印(まじるし)とした。
- ② 沖揚げ中の三半船。絵から見て漁は少なくないようだ。一人の男がタモ(ポンタモ)で巻背負(もっこしよい)の巻(もっこ)に鯨を入れてるところ。六月頃のいわゆる「後取り」と推定。船の先端が跳ね上がっているところから古い三半船か。
- ③ 一人棒状のものを持って立っている男。目前の三半船の側でタモを持って作業している七・八人の漁夫がおり、これらの作業状況を監視している船頭見習などの役人(やくびと)か。
- ④ 2の保津船と見做す。船の跳ね上げがないところから三半船の改良型、一廻り小型で、定置網の棹船や汲み船、或いは、この頃の「追い鯨」などに使用した。
- ⑤ 船綱(もやしずな) 船綱(はしげづな) 或いは張り綱(はりづな)ともいう。船入洞の五・六メートル先に土俵(砂利を入れた俵)を積み、アンカーを打って、陸の遣出し(やりだし・矢来の一部、跳ね出しともいう)の丸太にロープを張っておく。海が荒れ、波が高い時などの出船、入船に使用する。また風の時に常に船を舐って置く時も使用、時化の時などの場合は命綱ともなる。
- ⑥ 巻筒(マキド) ボーズまたはボンスとも云う。この図では不鮮明であるが、七個位描かれている。建物や船揚げ場規模から見ると描かれているのは比較的、大規模の建場である。船揚げ場で多くの人が行き交ったり、犬も走っている状況も描かれている。しかし、この場面は、海辺は波もなく穏やかで小規模な沖揚げ風景である。三半船や周辺で立廻っている人々の動向から、

以下に絵面中の各事項についての解説を述べる。

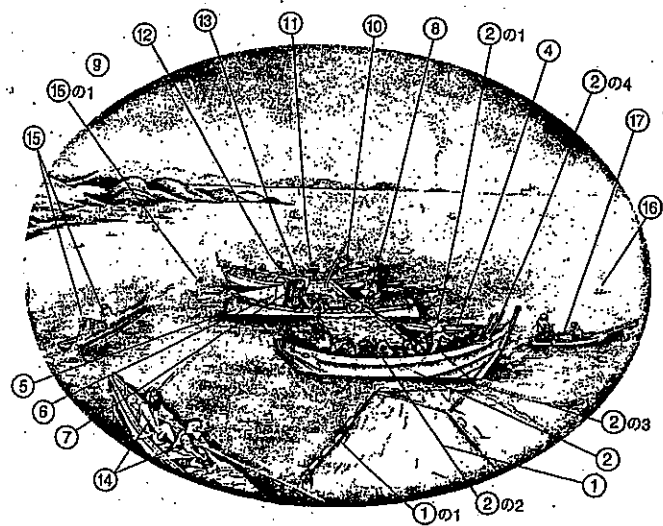


明治後期から昭和初期までの鯨漁三建場概要図

- 沖揚げも終盤近い状況と見受けられる。
- ⑤ ローカ(廊下) 汲み船から巻背負が鯨を担いで来て廊下に入れる施設。
- ⑥ 1、2 遣出し(やりだし)。(セイロ、岸壁とも云う。いずれも建物の土台に見えるが、渚に波消しブロックの様に丸太を組んで突き出し設置したもの。通称セイロまたは跳出しとも云う。干潮時などに渚の岩盤に、カナテコで丸太の太さに合せて穴を掘り、丸太を組み立て、ブドー葎やコクワ葎(大正期頃になるとポルトなど)で結び、骨組みが出来たら岩石や五郎太石を詰めその上に土地を入れてローカや作業場を造ったりする。
- ⑦ 絵図では低く土台のように見えるが⑧釜場の高さ位のものも多くあった。ちなみに、この釜場は遣り出しの上に作られている。⑦の1、2 ローカ。こちらの建物は、雑倉のようなもので、時には人が起居し、番屋とも呼ばれる。明治頃までは茅葺とも言った。屋根は草葺作り。大社造りを真似、三軒共サクリ(壁)は板壁、丸太を組み立てて造ったが多い。用途は、沖揚げ時に加工用の鯨を入れろ。この絵を見ると一間巾に丸太があるが、鯨を処理する時、一枚ずつ下見板を外せるようにし、鯨漬しをする際便利であるように工夫したもの。漁期が終ると、漁具、漁船その他陸仕事一切の道具を来期まで格納しておく。
- ⑧ 板蔵、木造で屋根は葎葎、板葎きがある。単に蔵、又は倉庫とも云う。用途は、乾燥物及び俵物(魚粕、数の子)他、筵類、荒縄などや米、味噌、醤油などの生活必需品等を保管する建物、単に蔵、倉庫ともいう。
- ⑨ 茅葎、木造板壁造り、番屋。内部は一部土間、板張り、長さ二間余のフゴム炬燵があり、壁際には二段式の寝床がある。沖揚げ中の陸仕事ではこの炬燵で食事する。沖から帰った時でも腹物を脱がず食事する。フゴムとは「踏み込む」の意で、青森、

イ. 事項解説

- ① 行成網。絵の中央に描かれているのは、行成網(ゆきなりあみ)の可能性が高い。行成網とは、箕(み)の形をした網(みあみ)に垣網(かきあみ)をもった大敷網(おおしきあみ)類の一種である。この網は定置網の中で最も古く、明治末期から大正にかけて主に東北、北海道でニシンを漁獲する重要な定置網であった。但し一八八五(明治一八)年、積丹町古平の漁業、斎藤彦三郎が開発した角網が普及されてから用いられなくなった。①の1 行成網の浮子手綱。浮子綱(あはずな)ともいう。近代はほとんどナイロンや麻製のロープを網の規模によって使用するが、明治初期ごろでは葉の皮をとった葦(葦心・みく)を纏った中堅繩(もしくは中間繩・ちゅうけんなわ)を使用していた。船は、軸が迫り出しているところから明治以前の古い三平船ではないだろうか。
- ② 起し船。軸が迫り出しているところから明治以前の古い三平船であろう。
- ③ 踊る漁夫。額を上げ両手を斜に、右足を上げて踊っている姿の男は踊っているようだが、左船縁で八・九人の漁夫が網起しをしているのに斉一を煽るため音頭を取っているのではないか。一般的には網起しの動作の中で先導する漁夫が音頭を取るのだが、隅々画家の目に船頭が大漁を期に飲酒し、浮かれて音頭を取っているように見受けられたことからこのように描かれたものでないか。



石狩国厚田郡厚田村旧樺太アイヌ漁業之図

ヤン衆とは、鮭場、練場に出稼ぎに来る季節労働者を云う。青森県野辺地方言葉によれば「ヤンシユウ」は「雇衆」で出稼ぎ漁夫のことをいう、とある。

しかし一説にはこれはアイヌ語と日本語からなり、即ち「アイヌ語地形語彙」によれば「北海道をヤウン、モンリ(陸の、国(くに))とよぶ内地本土」とあるところから、この「ヤウン」に衆がつき「内地衆」という意味が出来たものと言われ、またアイヌ語で「網」を「ヤ」と言うので、「ヤ衆」(即ち網衆)が訛じて「ヤン衆」になったものとも言われる。更に「家衆」「ヤンシユウ」とも言われる。(渡辺茂「北海道方言集」関連する方言に①ヤンチ、漁夫、茨城②ヤウチ、労働者仲間、北陸(新潟、富山、石川、福井)

石狩本町や厚田では、鮭練場等に入り込む出稼ぎ漁夫の野辺地方言葉による呼び名、方言と考えている。しかしアイヌの人々は古くから内地方面から出稼ぎ者を「ヤンチユウ」と発音したという。石狩、厚田の漁師の間では、昭和十年代頃まではよく「ヤウチ」(あいつ、あの人、仲間の意)と呼んでいた。

②の2 起し船のヤン衆。描写が不鮮明であるが、八・九人のうち鉢巻姿のものもあり、網起しの掛け声(音頭ともいうが)を唱和しながら枠網に追い込んでいく様子が見られる。これを切り声という。切り声とは、定置網の網起しで、最終段階に魚を枠網または枠網に入れる時の掛け声のことで、音頭とも言った。一声(ひとこえ)ずつ区切って掛けられた声である。

るための気合である。なお「切り声」の由来は、昔、伊勢神宮の造営の時に土気高揚のための掛け声として歌われた大朝木遣が北海道の漁場に伝わったものとも言われる。

②の3 繰り越し網。「網起し」にあたり、風や潮の流れで起し船が左右されないように漁夫が網を保持しながら繰り起して行き、船を安定させるための綱。船網の両端に張っていて漁夫二人によって操作する。

②の4 早稲(さつこい) 三平船や保津船を進めるための漕具。三平船では一四一六丁、保津船で一四一四丁、磯船では舷に配置し、繰るように操作して舟を進めるところから「繰り權(ねりがい)」とも云う。

網起しの時にはこのように軸に置く、外の用途は、最初に網を繰りあげる「シリズド」に厩台を組む際の骨組みに使用する。沖揚は大漁の時、昼夜兼行し、二・三日も続くこともあり、漁夫は交代でこの屋形で休息を取った。

シリズドの「シリ」とは「尻」「後」など物の尻に当る部分を指す。「スト」地曳網や建網などの最奥の魚だまり、または袋網をいう。建網の最終だまりは「上スト」という。

④磯舟 ⑤の枠網に繋いだりであるが、この磯舟の役目は建網を繰じて率先し作業しなければならぬ小舟である。やがて船頭になるべき若手の優秀な漁夫が乗り、網を建る前に、型の善し悪しを調べるため、荒波をも蹴って乗り出し確認する。また練が船網に入った場合、頃合を見て「前垂れ網(まえだれあみ)」「前障子網(まえじょうし)」を閉じる役目をするなど建網漁夫の主要部分を担当する。

職名としては「磯舟乗り」と云い、平屋(ひらや)と云い「二割増しの賃金を得、役人(やくびと)」「扱いと云う。役

文中に石狩地方の漁業用語が多出するが、煩瑣になるため最低限の解説に止めた。興味疑問のある方は、お手数ながら拙著「北海道日本海漁業用語辞典」を参照願いたい。

注1 吉岡玉吉 二〇〇九 「石狩浜地引曳網漁具図傳見」 いしかり歴史 二二二号

参考文献

- 厚田村小学校校歌 昭和一一、九、二六制定 厚田村小学校
石垣福雄 一九八三 「北海道方言辞典」
石狩市 二〇〇三 「石狩市年表」
樺太アイヌ史研究会編 一九九二 「対雁の碑」 北海道出版企画センター
水産百科学典編集委員会編 一九七二 「水産百科学典」 海文堂出版
北海道教育委員会編 一九七〇 「ニシン漁場」
吉岡玉吉 二〇〇二 「北海道日本海漁業用語辞典」
渡辺茂 一九七六 「北海道の方言」 図書刊行会

「石狩川鮭漁」の図について

工藤義衛

はじめに

「石狩川鮭漁」の図は、明治初期の石狩川河口における鮭漁の様子を描いた絵で、石狩市の観光ポスターにも用いられるなど比較的良く知られているものである。

この絵については、石狩市郷土研究会の吉岡玉吉氏が、漁業者の立場から分析を行っているが、そのほかあまり具体的な絵の内容に踏み込んだ分析は行われていない(注1)。

ここでは「石狩川鮭漁」の図について「どこを描いたのか」「いつ描かれたのか」「誰が描いたのか」の諸点について整理し、若干の考察を加えることとした。

一、「石狩川鮭漁」の図の概要

「石狩川鮭漁」の図は、北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園に所蔵されている絵画で、標本番号三三三三四一、大きさは縦百〇八センチ幅百四十七・八センチである。

取蔵の経緯に関する資料は多くない。昭和三十二年に作成された北海道大学大学院農学科会計掛の物品台帳には「絵画「石狩川鮭漁」の図」製作年不明(明治16年頃の筆) 開拓使より移管」とある(注2)。

これ以外、同図が取蔵された経緯に関する資料は残っており、詳細は不明である。しかも加藤克氏が指摘しているように、明治十六年には開拓使は存在しておらず、この台帳の記述には矛盾がある。しかし、本図の制作年代と目される明治十五・十六年ころは、ちょうど開拓使から札幌県へ以降する時期にあたり、制作に開拓使ないし札幌県が関わっていたことは間違いないであろう。

二、描かれた場所

① 駅通所「石狩駅」

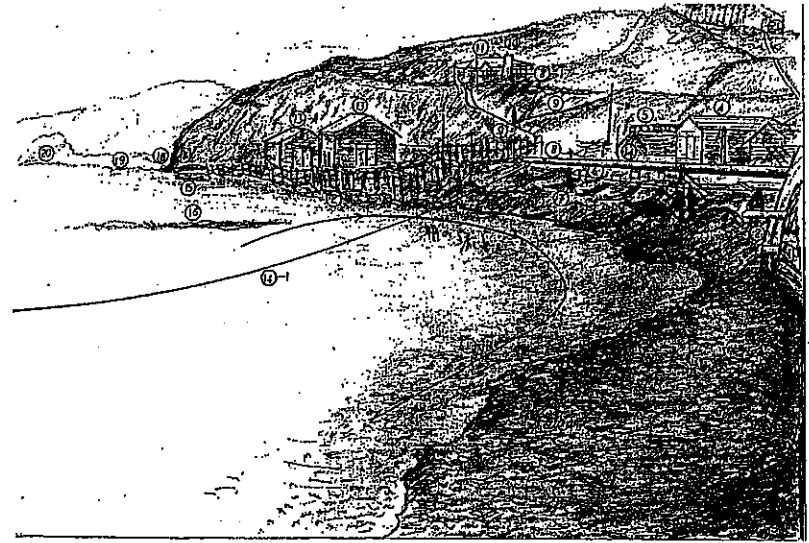
「石狩川鮭漁」の絵は、石狩川河口部での鮭漁の様子を描いてると考えられるが、それはいったい石狩川河口のどの場所にあたるのであろうか。その手掛かりは、画面右下にある「札幌縣廳七里石狩國石狩郡石狩驛」「篠路驛ヨリ三里貳拾壹町 錢函驛五里拾町」と書かれた標柱にある。



この標柱は、駅通所の標柱で、「石狩驛」とは、石狩にあった駅通所のことと考えられる。駅通所の標柱があるということは、当然、その近くに駅通所があるはずである。そこで、まず駅通所とは、どのような施設で、「石狩驛」がどこにあったのについてみてゆくことにしよう。

駅通所とは、人馬の継ぎ立て、旅行者の宿泊などを行う公的な施設で、官費によって運営された。「開拓使事業報告」によれば「石狩驛」の位置は「石狩國石狩郡濱町」で、その沿革は、「嘉永六年七月漁場請負人村山傳次郎自費設置本陣ト称シ駅務ヲ取扱フ鮭漁取税幾分ヲ手当トス〇明治六年五月駅通所ト改称徒前ノ手当ヲ廢シ更二年金四拾円及区入費ノ内ヨリ秣料金八拾円ヲ給ス〇九年五月燹災

資料I 四軒番屋前浜の寄り練の状況



写真各部位

- ① 寄りニシンの状況
- ② 矢来(やらい)の丸太、人影
- ③ 電柱(灯)
- ④ 屋号兵(ヤマビヨウ) 吉田亀太郎の板倉
- ⑤ 舟倉(三半船などの格納倉)
- ⑥ ボンズ(巻筒)
- ⑦ 磯舟
- ⑧ 高木架 身欠き加工用の二階建の木架
- ⑨ 丘(ボンビラ)に登る九九折り坂
- ⑩ 鉄索の橋(ケーブル架空索道)
- ⑪ 練番屋(網元、親方用)
- ⑫ 棧橋の杭
- ⑬ 練番屋。通称崎番屋
- ⑭ 船(もや)い綱桁
- ⑮ セイロ 簡易波消ブロック(矢来)に一種
- ⑯ シンプ(ズンプ・暗礁のこと、干潮になると現われる浅瀬)
- ⑰ 帆内(ほろない) / アイヌ語名(ボロナイ) 大津な川
- ⑱ 安瀬(やすすけ) / アイヌ語名 網をかける処など
- ⑲ 崎(さき) 住民が呼称する建場
- ⑳ 大沢(おおさわ) / アイヌ語名(バンケ) 練が一番群来る地域
- ㉑ 三吉社(堂) 三吉山(さんきちやま) 三吉さんと呼ぶ

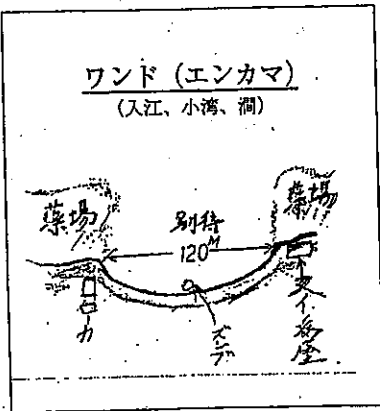
昭和十七(一九四二)年四月中旬頃、このワンド沖合で練が群来、漁業者等が投網したが、矢来に時化し連網業者(注、別掲、崎番屋の二建場になっていた)は桙網練諸共喪失、刺網業者は我が家を始め投網の半分も沖揚げ出来なかった。二日くらいすると風始め、ワンドにヒモと一緒にメートル余の高さに寄り練があった。二三日すると時化になり見る間に攫われていった。この現象は練漁最盛期の厚田浜で見る貴重な歴史的描写である。

二 写真の概要

- (1) 撮影年月
大正十五(一九二六)年四月上旬(例年上旬頃が厚く接岸している。)
- (2) 時間帯
地形、建物特に建物に当る日照、日影の状況から四月上旬で午後二時〜同三時頃と推定される。山に白く見えるところは残雪と見受けられる。
- (3) 撮影の場所(図I-⑬で示す)
撮影場所は仲番屋の番屋突端、崎番屋(四軒番屋)及びワンド(エンカマともいう、入江、洞の意)方向を写す。
- (4) 寄り練の場所(図I-①〜④〜⑥〜⑧〜⑩〜⑫〜⑭〜⑯〜⑰〜⑱〜㉑)
「仲番屋」「崎番屋」と云うのは番屋そのものの呼称のほか、番屋の周辺地域を指すことがある。①は②〜④崎番屋矢来下付近から遙に打ち揚げられた寄り練。手前の情景から、潮の流れと波の勢いで一メートル位の高さに積み上がった状態と推定する。四軒番屋は④の斜め後方。
①〜④あたりは波の荒い時は沖合に流れているが、時化が収まるにつれ渦巻き状になり、停滞し死んだ練は深味(三メートル前後)に漂っている情景。

注

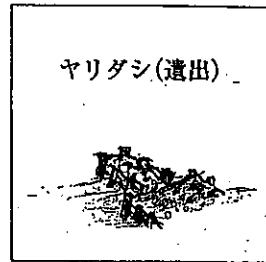
四軒番屋(しけんばんや・資料IV参照)
四軒番屋とは明治中期に石狩町本町(現石狩市)地区から厚田に練刺し網漁業者が二十二軒出向っており、その内の四軒(資料II・IV参照)が廃屋になっていた練番屋に漁期間(三月上旬〜七月上旬頃)中、建物を四つに仕切って入居したことから呼ばれた。(参考・明治二十六年(一九九三)年三月十三日、石狩から厚田へ練漁出稼ぎ漁業の船が、石狩河口から出帆した。北海道毎日新聞一七〇〇号)
四軒番屋に入った四軒は次の通り。
北、小熊市太郎 西、宮下定吉
南、吉岡政之助 東、吉田兵松(亀太郎)
わが家(筆者の父 吉岡文吉)が小熊市太郎後に入居したのは昭和十六(一九四二)年で、吉田亀太郎(昭和十七年で廃業)を残して吉岡(政)、宮下、小熊は昭和八九年で廃業、三軒分



昭和十七年頃ではこの矢来下は波に削られて即海になっている。この様子から陸(海辺)には一メートル以上打ち上げられ、且つ①—では寄りつかず海面に一〇メートル近く漂っているように見える。

② 矢来の丸太、人影

ニシン積み上げた小山横にも人影が認められる。港より奥手に鯨の積み上がった小山が三か所程見られるが、漁業者は余裕ある人は前浜に集めたか、催(さか)し(処理)切れぬ人は手をつけずまい。漁に従事していない村人が催(さか)す(処理、身欠きニシンを造る)ために拾いニシンをしたものと推定する。



③ 電柱(灯)

大正一〇(一九二二)年厚田村に電灯がついて練場の前浜にも灯りが点る。昭和十七年(一九四二)年では居住家屋に点灯はあったが屋外にはなく電線を自家で引いて雑倉(ぞうくら)等に点灯していた。

④ 吉田亀太郎の板倉

石狩町(現石狩市横町)からの「廻り船」による「鯨刺し網漁業者」吉田亀太郎(兵松 屋号兵(ヤマビヨウ))所有の板倉。昭和十六年廃業まで、以後取り壊す。その右隣の板倉は小熊市太郎方所と思われるが定でない。わが家が「四軒番屋」に行った頃は既になく兵(ヤマビヨウ)の板倉。

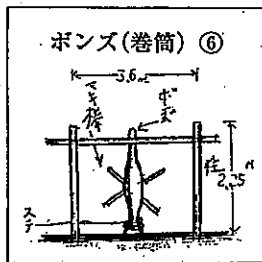
右側に茅葺の雑倉があり、これを使用した。

⑤ 茅倉(三半船などの格納倉)

建付けは低く雑倉ではない。位置から崎番屋配置の三半船(起し船、杵船、汲み船)保津船、何れかの格納茅倉と推定する。漁期が終る六月には、収納し翌春三月には引き出す。

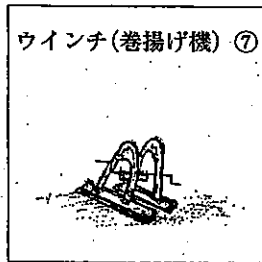
⑥ ポンズ(巻筒)巻揚機

構造から三半船など大型の漁船を「揚げ」「下げ」するに力を出せて利用度高い。小型漁船(磯船)では手間がかかり不便。昭和期に入ると小型の鉄製ウインチ(巻揚機)が普及し、刺し網業者では殆んど使用しなくなった。



⑦ 磯舟

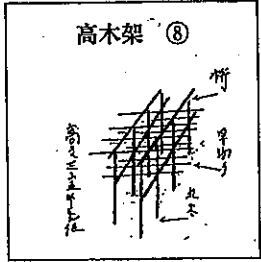
この「エンカマ」は主に「刺し網漁業者」の基地で、当時石狩から「刺し網漁者」四軒の他、本村の業者四、五軒が前浜を「沖揚げ場」として使用しており、五、六隻以上の磯舟が見られる。時化後と見えて磯舟は陸の奥の方まで揚げられている。



⑧ 高木架(たかなや) 身欠き加工用の二階建の木架(干し場)

注、木架(なや) 身欠きニシン製造時「まじ(まっか)」「けた」「早切り(さきり)」を組み合わせ乾燥させる干し棚。二階建を高木架という。大正期頃までは大半の鯨はメ粕(魚粕)製造であり身欠き加工は親方(網元)や漁夫の自備用として僅かに加工されていた。見るに「ポンビラの丘」の「高木架」、崖下番屋横の「高木架」には身欠き加工用の鯨は全く掛っていない。

従って「寄り鯨」は沖揚げ開始前に大時化があり、杵網が何枚も破れて流失「寄り鯨」となったため。状況から漁で云う「走り鯨」(三月末から四月下旬に獲る鯨)と推定する。



注、五月上旬から獲る鯨を「後取り鯨」という。

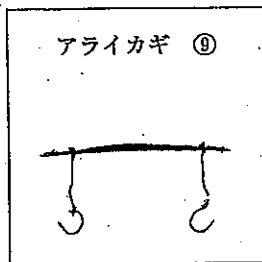
注、「厚田のあゆみ」年表では、大正三(一九一四)年にしん大漁(大正一〇、一一、一二、一三、一四、一五)とある。

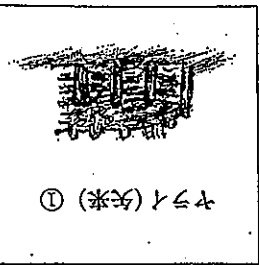
⑨ 丘(ポンビラ)に登る九十九折り坂(現アイロード夕日の丘)

通称ポンビラ「小石の浜」と呼ぶ。今日の夕陽が丘、海拔二〇メートル位、此の坂は崎番屋で催された(処理された)鯨(身欠き加工用)メ粕を丘の木架場先干場に運ぶ漁夫らが登り下りした坂。

昭和十七年(一九四二)年わが家が「四軒番屋」に入居したころはこの坂道は「斜道があつたな」と思う程度であった。④⑤の間に丘に登る直線斜度三〇度(海拔十五メートル位)位の坂道があり身欠き加工用の鯨を「春(もっこ)」や「粗い鉤」で木架場に運んだものである。

昭和十七年(一九四二)年わが家が「四軒番屋」に入居したころはこの坂道は「斜道があつたな」と思う程度であった。④⑤の間に丘に登る直線斜度三〇度(海拔十五メートル位)位の坂道があり身欠き加工用の鯨を「春(もっこ)」や「粗い鉤」で木架場に運んだものである。





ヤシム(米象) ①

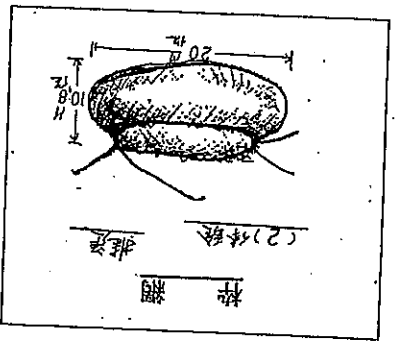
この象は、ヤシム科のヤシム属に属する。頭部は、
 長方形の頭部をもち、口は、
 長方形の口をもち、
 体は、
 長方形の体をもつ。①

米象の分布

この象は、ヤシム科のヤシム属に属する。頭部は、
 長方形の頭部をもち、口は、
 長方形の口をもち、
 体は、
 長方形の体をもつ。①

(11月1日) 六十粒。この象は、
 長方形の頭部をもち、口は、
 長方形の口をもち、
 体は、
 長方形の体をもつ。①

この象は、ヤシム科のヤシム属に属する。頭部は、
 長方形の頭部をもち、口は、
 長方形の口をもち、
 体は、
 長方形の体をもつ。①



(2) 体長 幅

この象は、ヤシム科のヤシム属に属する。頭部は、
 長方形の頭部をもち、口は、
 長方形の口をもち、
 体は、
 長方形の体をもつ。①

441-2554

441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

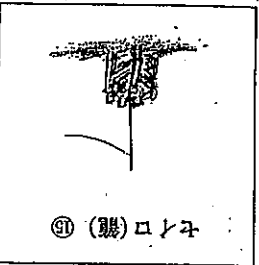
441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

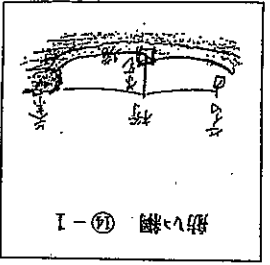
441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

441-2554 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



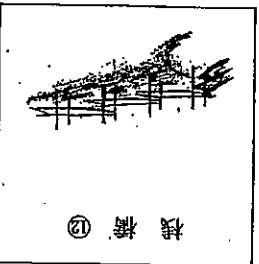
セイロ (葺)

セイロ (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



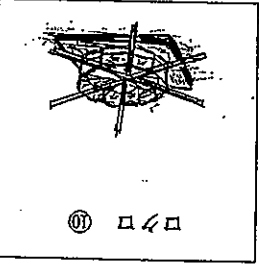
遊子 (葺)

遊子 (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



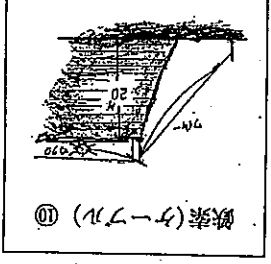
葺 (葺)

葺 (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



ロウロ (葺)

ロウロ (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



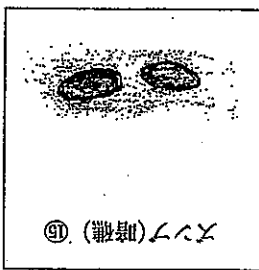
葺 (葺)

葺 (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。



葺 (葺)

葺 (葺) 田舎の風景。田舎の風景。田舎の風景。

参考

一、厚田浜に開かれた樺太アイヌの鯨漁場
明治十二(一八七七)年、明治三十八(一九〇五)年(二十八年間)

明治八(一八七五)年日露間で締結された樺太千島交換条約によつて八五六名の樺太アイヌが北海道宗谷に強制移住させられ翌九年石狩の対雁(現江別市)に移されて開拓(農耕)を強いられたが馴染めず、漁業に従事することを条件に同年石狩町来札(現石狩市八幡町)に移った。保護監督者上野正の許しに明治十(一八七七)年九月頃、石狩鮭場(来札、シビシウス、対雁、知狩)四場所。

注、シビシウスは現地名、志美 知狩は現地名、知津狩と史料する。

厚田鯨漁場 同年三月頃、三場所

別狩番屋 五二人 仲番屋 五八人

崎番屋 五三人 計一六三人 資料V参照

注、鯨場は夫々所轄の番屋に起居して漁労に従事する。

三場所共建網(定置網三ヶ統)

村の中心で利便の漁場であった。但し厚田川あり。

明治三十八(一九〇五)年まで二十八年間従事していたが、同年日露戦争講和条約締結により南樺太の割譲を受け翌三十九年帰郷した。「対雁の碑」より

二、厚田浜練建網(定置網)の流れ

明治十八(一八八五)年積丹町の入舸の船頭齊藤三郎が練漁の角網(定置網)を発明するまで行成網(嘉永二(一八四九)五〇)年頃、歌楽寿郡町の漁業者佐藤伊右衛門、駆網(みあみ)、袖網、垣網の三部による定置網。それ以前は「ざる網」から「大敷網型」(おおざきあみがた)の定置網(建網、文久三(一八六三)年大成町)と変化させて練を獲っていた。

厚田郡内でも、これにあやかり操業し明治中期(明治三三(一八九〇)年)頃では望来から濃登まで、二二三ヶ統の建網があったと記録されている。それが年と共に接岸が枯渇し、駆漁廃業する業者が続出して、昭和初期から同七、八(一九三三、三〇)年では一八ヶ統(サランベツ、横泊、ウエンシリ、古潭、押琴、小谷村「沢田の沢、菊池の沢」山下別狩、厚田「仲番屋、崎番屋」幌内、安瀬、大沢、チャラツナイ、太島内、赤岩、濃登)となり。

昭和一〇(一九三五)年から同一五(一九四〇)年では九ヶ統(横泊、古潭、小谷村「沢田の沢、菊池の沢」別狩、崎番屋、安瀬、大沢、濃登)昭和一七(一九四二)年では四ヶ統(横泊、崎番屋、安瀬、濃登)と年毎の練回遊の減少、不漁年による。

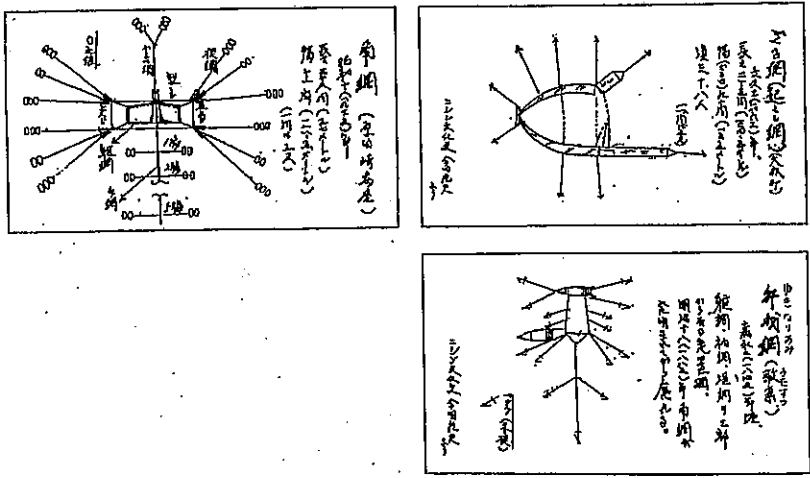
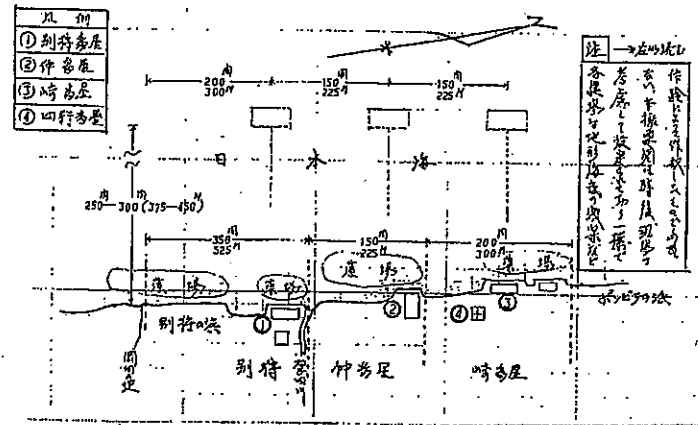
昭和二〇(一九四五)年以降は資本家による操業はなく、携わつた村の有志(漁夫)による共同で既存の三半船や漁具を使って網(角網)を建てていた。

樺太アイヌの人々の操業時(明治一〇(一八七七)年は行成網で、その後明治二〇(一八八七)年初期頃より樺太に引揚げる。明治三九(一九〇六)年までは角網を使っていたと史料される。

参考資料

「ニシン文化史」一九九〇 今田光夫

資料V 厚田浜練三建場(別狩、仲番屋、崎番屋)見取概要図





二、粒買船航海のあらまし

注(一) 本項は昭和一七、八年(一九四二、三)年四月上旬より五月十日頃まで、樺太西海岸から本州秋田県土崎港(現秋田港)に粒買船として航海した五月二〇日北千島鮭網流網漁に出漁する独航船、吉岡漁業部、船主吉岡三之助所有第五長栄丸(二五七馬力、積載能力一七五馬力、速力九ノット)、積載能力一萬貫。及び金田漁業部船主金田寅之助所有第五吉星丸(三〇七馬力、速力九ノット、積載能力一萬二千貫)の秋田一航海、新潟一航海の推定運行状況を記載したものである。

(二) 船舶の操縦運転について

二十屯以上の船舶は登記船(登録船)と呼称し当時の運輸通信大臣が発行する海技免状(航海士甲、乙、丙種)の取得者でなければ操縦、機関の運転はできなかった。

粒買船は石狩港を船出して一昼夜弱で樺太西海岸、本斗(現ネベリスク)真岡(現ホルムスク)沿岸の鯨場に至って即買い付けして満船し目的地に向かう。樺太西海岸から土崎港まで凡そ五二五哩。樺太西海岸から新潟港まで凡そ八七九哩(哩は一、六〇九メートル)

昭和十年代頃の小型漁船(二十屯以上)や小型運搬船(二十屯以上)それ以下でも海図、定規、羅針盤を頼りに操縦、陸の基点、岬を見て、船長(船頭)始め堪能な乗組員によってラット(操縦輪)を取って航海したものである。生簾など満船すると速力は二割から三割方落ち、それを見越して航海することが肝心であった。此の廻の鯨の回遊は時代を経つに従って北海道西部海岸を厚田、浜益、増毛と群衆は北上し四月中旬から五月中旬まで天売、焼尻、利尻、札文、樺太西海岸(本斗、真岡)まで移動して行き、多くの粒買船も北へ北へと積み込みに殺到した。

漁船に冷凍設備のない時代ダンブル(船倉)には積みするた波浪に向かって進み波間に突っ込み浮力を失いそのまま沈没した漁船もあった。

注「愛寇のヤマセ」「寿都の出し風」「茂津多のヤマセ」早春から初夏にかけて本道西海岸の航海の難所であった。

三、愈々生簾満船して内地に向かう。

注 粒買船(積船)は、満載すると凡一〇、〇〇〇貫(三七、五〇〇キロ)ほどになった。この時代北海道人は本州を内地という。多くの船は新潟港を目指した。本斗沿岸の鯨建場(定置網)で買い付けし荷重に出航、樺太南端のノトロ岬を交わして右手に浮かぶ海馬島(現モノロン)を見ながら本道西端の野寒布岬(稚内町、現稚内市)に進路を取る。稚内港(粒買船四九隻(昭和一七年時)陸揚港(生売り、自家加工)避難港)、日和を見ながらピルジ(漁、船底にたまった汚水や積み荷(ニシン)から出た水)を手押しポンプで汲み出しながら札文、利尻島の山岳、残雪の残る利尻富士(利尻岳、一、七二二メートル)を仰ぎ見ながら利尻水道を南下、天売焼尻島に進路を取る。留萌港(粒買船三二隻、陸揚港(生売り、自家加工)避難港)を左手に見て通過。

風では積丹半島(積丹岬)にコンパス(注、羅針盤、進路の俗称)を執るが出し風(ヤマセ)の強弱によつて小樽高島岬、強風になれば雄冬岬、続いて愛寇岬(十屯以下の漁船では通常のコース)と石狩平野から石狩湾に吹き下ろすヤマセを避けながら陸伝えに航海し、古潭沖あたりから高島沖に暫時コンパスを合わせる。

- 浜益村(粒買船九隻、陸揚港(生売り、自家加工))
- 厚田村(粒買船十一隻、陸揚地(生売り、自家加工))
- 石狩港(粒買船二十四隻、陸揚港(生売り一三隻、自家加工六隻、生売り自家加工五隻、避難港))
- 小樽港(粒買船二〇隻、陸揚港(生売り、自家加工、避難港))

粒買船(独航船)の長年航海の事例

船舶番号41744・船籍港石狩港 総トン数 24.93
 公称馬力 75馬力(無煙水=炭薪) 速力 9.12ノット
 積載能力 1万貫
 所乗者 船主吉岡三之助、船長吉岡三之助



注、本船は昭和十一年四月下旬北千島鮭網流網漁に出漁し、樺太西海岸の厚田、浜益、増毛、天売、焼尻、利尻、札文、本斗、真岡を航海し、石狩湾に到着した。

め、こなれ(生きが下がる。くたくなになること)をなくし鮮度を維持するには十屯未満の小型船が適すが、遠洋航海で秋田新潟まで行くには積荷に比重のかわらないですむ二〇屯から三〇屯級の漁船(独航船のような船)が最適だった。

漁船は主に木造であったが造りは頑丈に出来ているため慢心して船も手伝って必要以上に積荷をする乗組員(船長)もいた。

満船すると停止しても甲板の低いところでは海水が浸き、長靴でなければ歩けないほどで航海、ヤマセ(南東の風)の強い日

- 余市町(粒買船一〇六隻、陸揚地(生売り、自家加工))
- 余市町(粒買船五〇隻、陸揚地(生売り、自家加工、避難港))
- 積丹岬を越すと即神威岬、過ぎる海路は開け替は鯨のメツカ神恵内、泊漁港。

- 神恵内村(粒買船八隻、陸揚地(自家加工))
- 泊村(粒買船十八隻、陸揚地(生売り、自家加工兼用))
- 神恵内村川白岬の沖合まで来ると岩内の雷電山(一三二二メートル)から下りる雷電岬が迫り進路を執る。スケノウ(スケノウタラ)の主産地、岩内港を左手に見ながら進む。

- 岩内港 三月四月はスケノウはいづれは魚閉期となり在籍中の漁船は粒買船として就航した。(粒買船一五三隻、陸揚港(生売り、自家加工))
- 山岳地帯の海岸は、ヤマセは山系に遮られ穏やかだが雷電岬(刀掛岬)交わして磯谷(寿都)沖に差し掛かると寿都港に吹き降ろす「寿都の出し風」(注、狭い平野部から吹き降ろす南東風。春秋最も強く吹く。小型船舶の難所)

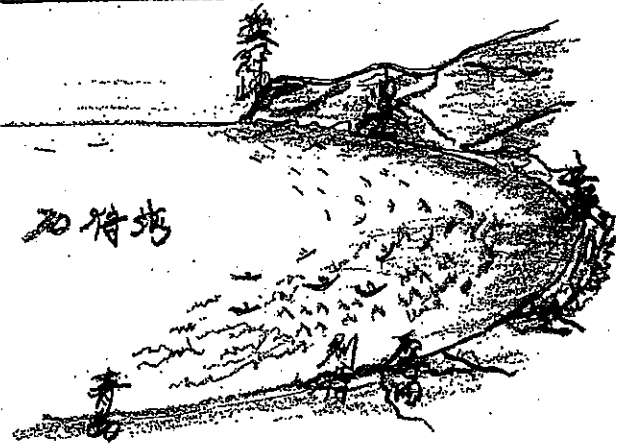
- 寿都港(粒買船二九隻、陸揚港(生売り、自家加工、避難港))
- 強いときは寿都港に入りながら航行するが弱い時は直候(直進のこと)弁慶岬(寿都)に針路を執り、交わすと島牧、狩場山(二、五二〇メートル)地から下りる白糸岬に碇を取り交わすと船舶の難所と云われている茂津多岬(その昔、西蝦夷三輪岬(雄冬、神威)の一つであった)当該岬を過ぎると西方に奥尻島が見え鳥肌

に向けて舵を取る。近付くに従って島の難所と云われる稲穂岬(粟の河原)が行く手に迫る。周辺は浅瀬で幾多の船舶が乗り上げる海難事故があった由、海図を覗みながらラット(花輪)を操る。ヤマセの強く吹くときは茂津多岬から海岸に沿って北檜山の水垂岬、尾花岬、大成町の帆越岬にコンパスを執り交わすと熊石、乙部、江差の街並を左に見て進む。右手後方に奥尻島、右西方方向に

船長 吉岡芳美 明治四二年九月五日生(父母 鳥見浜生れ 石狩町)
 機関士 岩本勇作 明治四五年三月三日生(石狩町新町)
 水夫長 小畑六太郎 大正四年一〇月六日生(石狩町横町)
 油差 有田助次郎 大正十一年八月十七日生(鳥見浜)
 水夫 有田三郎 大正十三年三月一〇日生(鳥見浜、助次郎の叔父)
 水夫 山田竹雄 大正十五年一月三〇日生(鳥見浜)
 (一)乗組員の所得 注 粒買船の乗組みは本業に非ず臨時収入である。
 給料
 船長 百二十円
 機関士 百十五円
 油差 八十円
 水夫長 八十五円
 水夫 七十五円
 歩合金
 水揚げ純利益の七分を歩合金とする。但し生練買入資金、燃料費その他練買入売り場用する一切の費用通信費、消耗品等を差引きたる利益金。食料費は乗組員一人に付一ヶ月拾八円の割りで支給される。以上連合会。
 航海手配など
 昭和十七年三月九日石狩練運搬船統制組合生練運搬船協定事項
 (一)航海手当支給の件
 各自任意に支給すること
 但し乗組員数ヨリモ一人分多ク船主ヨリ支給ス
 其ノ配当方法、船長五分、機関士三分、水夫長二分ノ割合トス
 (二)漁夫歩合金ノ件

水揚げ純利益ノ七分ヲ歩合金トシテ支給スル事
 但シ生練買入資金燃料、其ノ他 練買入売場ニ用スル一切ノ費用 通信費、消耗品等ヲ差引キタル利益金
 (三)乗組員の食費支給ノ件
 食料費ハ乗組員一人ニ付一ヶ月拾八円の割ヲ持テ支給ス
 (四)買入品以外ニ乗組員個人ニテ別途積込セル練其ノ他鮮魚ト言ヒ全部船主ノ収入トスル事
 右四項ハ大型船ニノミ適用ス
 入金金並ニ損害金徴収ノ件
 ① 石狩町漁業組合ニ加入セル漁船一隻ニ付年拾円也ヲ会費トシテ納入スルコト
 ② 右ニ加入セシ漁船ハ損担金トシテ公称馬力一馬力ニ対シ年參拾圓ノ割リニテ納入スルコト
 右会費負担金ハ即時漁業組合ノ係員ニ納入スルコト
 取り決め時漁組内に漁業書記を置き同十七、八年は順調に処理されていたが、十九年二十年は戦争終盤になり海運危険に陥り解散状態になり戦後(昭和二十年以降)船主個々の運営になった。(金銭取り引きより物々交換が横行し、公定価格が無視され価値の時代)
 五、余話
 (一)厚田村青島丘陵から見る粒買船の勇壮
 厚田村(現石狩市厚田区)の青島(小谷村)のガンケ(崖)に立ち満船して進み来る粒買船の波を蹴立てる勇壮を一同悦に入つて見守る。昭和十二年(一九三七年)年筆者小学校六年生の五月上旬である。厚田浜の練漁は四月中旬頃が最盛期で近海の粒買船の往来は終わっている。今時の子供らは集まって路傍を走る自動車の車種やら色、ナンバープレートなどを当て合ひ悦になつてゐるよ。

粒買船の特長と往く、2/2



昭和12年5月上旬厚田村青島から愛冠岬を望む。ヤマセ(南東の風)強く吹いたため粒買船が生練を積船して数十隻岸寄りに航海していた。悪友と海を謀立て進む雄姿と数を競って楽しんだものである。筆者小学校6年生。

この頃の子供らも海上を往き来する船舶の容姿や数などを競つたものである。

石狩湾を航海する船は風の日は遠近に点在し船の大小、数を数えて楽しむが、ヤマセ(南東の風)が強く吹く時は雄冬師から愛冠岬と岸寄りに進んで来る。特に石狩湾の四月、五月は出し風(ヤマセ)の猛烈に吹く時期で「寿都の出し風」を羨く恐さがある。

(二)魚船と米の物交(物々交換)の時代

昭和十年代は戦争最中(日中戦争、太平洋戦争)の時代で諸物資(衣食住)は日増しに苦しくなり、統制経済著しく金銭売買より物々交換が主体となつて、尚戦争が終わつて何とかなるだらうと思いきや一層物交が激しくなつた。統制は解けず推移する中で非公式に船舶による魚船と米の物交が始まつた。
 秋田県土降港(現秋田港)に行き、米処の大曲(現秋田県大曲市大曲)に行くに魚船一俵(正味二十四貫(九〇キロ)、米三俵(一俵十六貫(六〇キロ))と交換する。米を積んで利尻、札文島に行くところでは米一俵で魚船三俵で交換するという漁家と農家が欲しい物品を船速(速力)の速い漁船が北千島鮭鱒流網漁に出漁する漁開期、片手間に二、三回航海し乗組員の臨時収入とした。開商売であり粒買船のグループとは別行動であつた。

この時期は奥(利尻、札文、天売、焼尻)から粒買船が喘ぎ喘ぎ愛冠岬を交わして小型船程岸寄りに来る。大型船でも風波を避け湾内を航行する。四、五人の悪童が「オレは五十五隻数えた」「オレは五十七隻数えた」中には「そつたらに居るえべー五十五隻が本等だべ」と交々。船は大小様々(二〇屯一〇〇屯まで)、数も然ることながら速さや船の格好も見極めの対称だつた。
 何艘もの船が白波を蹴立てて風浪に突つ込んで船を上げて来る様は活動写真で見る軍艦(駆逐艦)宛(さながら)である。波を掻き分けて進んで来る姿は軍艦マーチを歌いながら雄姿を見守つたものもある。見ている間に白波を分け進んでいる船が一瞬見えなくなり「アレ、出てこない、沈んだ」と叫んでる間に頭(船)をもたげて乗り切つて進む、皆が「格好良いなア」「駆逐艦みたいだなア」と叫んで悦になつてゐた。時化時の操船の苦勞も知らず早く大人になつてあのような船の船長になつて舵を執つて見たいと思つてゐた。

組合名	登録番号	船名	吨数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
浜益運搬船統制組合	1032	はま丸	19.95	50				浜益漁組
	1033	第一石狩丸	18.46	30				藤原 右藏
	1034	第三〇和洋丸	19.9	60				加賀谷 多三郎
	1035	八幡丸	19.02	60				工藤 勘次郎
	1036	幸徳丸	10.39	12				浜益漁組
	1037	長栄丸	10.00	21.83				
	1038	萬盛丸	9.50	29.73				中島 春吉
	1039	進盛丸	19.00	35				工藤 勘次郎
	1040	大福丸	4.80	6.0				高橋 銀次郎

合計 44隻

資料① 昭和16年、昭和17年石狩三地区鯨生積漁(粒買)船調

組合名	登録番号	船名	吨数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
石狩運搬船統制組合	947	第三熊野丸	30.81	65	11000	自家加工	小樽 留萌	福岡 長次郎
	948	第三相生丸	18.00	55	7500	生売	小樽 厚田	田村 兵松
	1002	間瀬丸	24.94	51	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	金田 寅之助
	1003	萬歳丸	10.36	16	2500	生売	石狩	忠海 多兵衛
	1004	第一北洋丸	11.43	25	2200	々	石狩 小樽	宮下 定吉
	1005	第二吉星丸	24.94	80	10000	々	小樽	金田 寅之助
	1006	昭栄丸	5.44	12	1500	々	石狩	相原 重治
	1007	長栄丸	25.21	54	10000	自家加工	小樽 留萌	吉岡 三之助
	1008	第五長栄丸	24.93	75	10000	生売 自家加工	々	々
	1009	共徳丸	23.73	63	7000	自家加工	小樽	々
	1010	白龍丸	24.96	70	8500	々	々	後藤 要次郎
	1011	第五白龍丸	24.84	60	8000	々	石狩	々
	1012	龍生丸	24.93	75	10000	生売	小樽 留萌	柴田 久吉
	1013	第三南丸	11.94	25	6500	々	小樽 石狩	南 善一郎
	1014	南丸	5.70	8.0	1500	々	々	田中 周作
	1015	第五昭宝丸	24.96	70	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	吉田 庄助
	1016	第二長運丸	27.11	80	10000	々	々	有田 留三郎
	1017	第二田村丸	9.00	12	2000	生売	小樽 石狩	有田 久治
	1018	第 幸徳丸	11.38	12	2500	々	々	高澤 貞雄
	1019	扇松丸	10.00	25	3500	々	々	鈴木 傳吾
	1020	昇龍丸	6.74	13	2500	々	々	吉岡 興平
	1021	第三梅丸	24.94	60	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	吉岡 綱雄
	1022	第二柏丸	19.38	50	6000	々	々	内山 昇
1023	稻荷丸	5.80	8.0	1200	生売	小樽 石狩	岸 庄平	

計 24隻

注、24.5吨級の漁船は秋田土崎港、新潟港に一航海した。

組合名	登録番号	船名	吨数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
厚田運搬船統制組合	567	第二金比羅丸	8.39	16	500	生売	小、留	
	568	宝盛丸	4.80	8.0	1500	々	小	
	569	第三宝盛丸	18.73	40	4000	生売 自家加工	小、留、厚	チャーター船
	570	厚生丸	17.88	60	8000	生売	小、稚	チャーター
	571	久吉丸	9.90	12	2500	々	小	
	572	八幡丸	10.00	12	4500	々	々	
	573	更生丸	10.00	10	3000	々	々	
	574	第二共盛丸	10.00	12	3500	々	々	
	575	八幡丸	19.50	40	5000	々	小、留、稚	チャーター
	576	第一漁吉丸	19.50	60	6000	々	々	チャーター
	577	大和丸	19.97	50	6000	々	々	チャーター

計 11隻

粒買船主、小山幸一、西田幸一郎、佐藤(大正満)、八島政雄、佐藤常三郎、御引岩蔵、住谷治、伊藤市丈、佐藤久五郎(濃登)、竹田盛爾(古澤)、河内久蔵(古澤)

